

東京大学トライリンガルプログラム・中国語

2020 年度南京サマースクール報告書

～3 週間完全オンラインでの初の試み～



全体日程

月日	午前(8:00-12:00)	午後(14:00-17:00)
7月11日(土)	選抜試験	
8月10日(月)	中国語授業4コマ	始業式 南京大学校内見学
8月11日(火)	中国語授業4コマ	南京大学学生との交流①
8月12日(水)	中国語授業4コマ	
8月13日(木)	中国語授業4コマ	中国語講演1「中国の文化 保護政策」
8月14日(金)	中国語授業4コマ	南京大学学生との交流②
8月17日(月)	中国語授業4コマ	南京大学学生との交流③
8月18日(火)	中国語授業4コマ	田家炳高校日本語クラス生 徒との交流(1)
8月19日(水)	中国語授業4コマ	
8月20日(木)	中国語授業4コマ	中国語講演2「南京の歴史 文化と南京博物館紹介」
8月21日(金)	中国語授業4コマ	南京大学学生との交流④
8月24日(月)	中国語授業4コマ	南京大学学生との交流⑤
8月25日(火)	中国語授業4コマ	田家炳高校日本語クラス生 徒との交流(2)
8月26日(水)	中国語授業4コマ	
8月27日(木)	中国語授業4コマ	中国語講座3「中国の社会 的弱者の支援と教育」
8月28日(金)	中国語授業4コマ	南京大学学生との交流⑥ 修了式
9月11日(金)	反省会	

目次

はじめに

- 中国語サマースクール開講の辞・・・朱小易・・・1

活動報告

1. 南京大学学生との交流・・・2

- 1-1. 第1回交流（8月11日）・・・小坂涼
1-2. 第2回交流（8月14日）・・・前田未来
1-3. 第5回交流（8月24日）・・・能森恵佑
1-4. 第6回交流（8月28日）・・・原田紗来

2. 田家炳高中生徒との交流・・・10

- 2-1. 第1回交流（8月18日）・・・柳田堯紀
2-2. 第2回交流（8月25日）・・・熊木雄亮

3. 中国語講演・・・15

- 3-1. 「中国の文化保護政策」（8月13日）
講師：南京大学政府管理学院・姚遠副教授・・・米原有里
3-2. 「南京の歴史文化及び南京博物館の紹介」（8月20日）
講師：南京田家炳高中・施江副校長・・・施毅龍
3-3. 「中国の社会的弱者～社会的支援と教育～」(8月27日)
講師：南京大学社学院・賀曉星教授・・・石井敬直

印象記

- 4. 南京大学授業担当教員からのコメント . . . 21
 - 4-1. 李宇晨 (1 班教員) 日本語訳・山田崇太
 - 4-2. 杭蕾 (1 班教員) 日本語訳・石川皓大
 - 4-3. 劉璐 (2 班教員) 日本語訳・王経博
 - 4-4. 王大莹 (2 班教員) 日本語訳・Y.T

- 5. 参加学生の感想 . . . 26
 - 5-1. 「サマースクール、概要と言語学習の教訓」・浦彩人
 - 5-2. 「オンライン研修というあり方」 Y.T
 - 5-3. 「積極性」 山田崇太
 - 5-4. 「中国語学習への意欲」 明島加苗
 - 5-5. 「謝謝同学们、老师们。」 王経博
 - 5-6. 「中国語をマスターしたい」 妹尾なつみ
 - 5-7. 「オンラインサマースクールの学習効果」 . . 石川皓大
 - 5-8. 「画面越しで体感”した中国」 王力敏

反省会

- 6. オンライン反省会記録 (9月11日) (司会: 熊木雄亮) . . . 41

おわりに

- コロナ禍の中の南京サマースクール実施 . . . 伊藤徳也 . . . 66

執筆者一覧

中国語サマースクール開講の辞

南京大学海外教育学院副院長 朱小易（開講式・8月10日）

伊藤先生、菊池先生、学生の皆さんこんにちは！ようこそ南京大学へ！
今回は、このような特殊な状況の中で皆さんにお会いすることになりました。
コロナ禍のなかで、東京大学・南京大学双方の大学の先生方が相談を重ねて、
今回の実施に至りました。東京大学・南京大学のサマースクールは、今年で第
8回目ですが、今年のような特殊な形態での実施は初めてのものになります。

オンラインでの授業は当然、教室での授業とは大きく異なります。教室での
授業を行えることに越したことはないのですが、現状では、この方法しかあり
ません。ただオンライン授業には、悪い点ばかりではなく、良い点もありま
す。先生との距離が近くなり、様々な質問ができることがその1つです。

コロナが私たちを離れ離れにできてしまっていますが、現代科学技術の恩恵を
受けて、こうした形でもまた皆さんで集まることができています。私もITが得
意ではないので、とても大変で、全てが新鮮な物事になっています。

今回、双方の先生方の努力、またこの特殊な状況下でもサマースクールに参
加するために集まってくれた学生さん達の中国語学習への熱意によってオン
ライン・サマースクールの実施が可能になりました。オンラインでの学習を継
続し、しっかり学ぶためには、本当に強い自己管理能力が求められるもので
す。こうした困難な状況のなかでも、学んだことをしっかり身につけて、この
3週間で、通常の教室での授業を受けるのと同じくらいの力をつけて欲しいと
願います。特殊な状況下での初めての試みに皆さんは挑戦するので、この新た
な挑戦が実現可能であるということをぜひ示してもらいたいと思います。

最後に、今回は、皆さんに南京に来てもらうことができませんでしたが、コ
ロナ収束後には、ぜひ南京を訪れてください。南京は非常に美しい古都で、南
京大学は中国の中でも最も古い歴史を持つ大学の1つです。ぜひ今後、実際
に南京を訪れて、自分自身で現地を体験して欲しいと思います。その際には、南
京大学にもぜひ足を運んでください。

再度、双方大学の先生方のサマースクール実施への努力に感謝をします。こう
した形ではありますが、皆さん南京大学へようこそ！

（日本語訳・菊池真純）

活動報告

1. 南京大学学生との交流

1-1. 第1回交流（8月11日）

小坂 涼

初回の南京大学学生との交流はまず双方の自己紹介から始まり、中国の祭りと、祭日が特に関係する地方の紹介が主な内容であった。清明節、端午節、七夕節という3つの農曆上の祭日を由来、その祭日における伝統的な行事や習慣という観点から分かりやすく画像や動画の添付された日本語訳付きのパワーポイントで解説をしてくださった。南京大学学生の発表は入念に準備しており、自身が紹介する観光地へ赴いて解説動画を撮影した者もいたことは驚きと共にありがたさを覚えた。

交流は時折日本人参加者に対して「なら日本ならどうなの？」という質問が飛ばされながら進行したがそこでは日本人の自国の文化への理解の浅さを痛感した。祝日とは単なる休日ではなく、その国の社会や歴史、地理環境ひいては国民の感性、考え方を反映したものであり祝日への理解は自国への理解に大きく関わる。しかし日本人は祝日の日程こそ覚えてはいても、なぜその祝日があるのかやその祝日になぜ～を食べるのかまでは知らない人がほとんどではないのか？自分の住む環境（この場合は母国）を知っているかどうか、愛しているかどうかはその者の幸福度や動機に直結すると僕は思っている。失われた20年間で日本が実際のところ何を失ったのかが垣間見えた気がしたと言っては大袈裟かもしれないが、日本人が自国への理解を深める必要があることは確かである。

この交流、そして南京研修全体を通して抱いた感想は大きく分けて2つである。一つ目はオンライン国際研修の可能性である。僕はこの研修に参加した当初、本来南京に行ってしまうものをオンラインで遂行しても普通の中国語レッスンと変わらないのではないかと正直感じていた。しかし、交

流では南京現地で本人たちが撮影した解説動画が用いられることも多く、現地の街並みを感じることができたのはもちろんのこと、南京の街や自然の中ではどのような音が聞こえるのか？どのような気候でどのような動物がいるのか？その場所を訪れた中国人が抱く感想は何か？などなどインターネット上では知ることが難しい現地の生活の細部にまで触れることができた。

また、幸い様々な人と中国語を話す機会があり実際の発音やよく用いられる表現が日本国内で触れるものとは異なることを知ることができ更に、午前と午後の間には2時間のお昼寝のための休憩時間があり研修中は中国人のようにお昼寝をする習慣がついた。加えて授業に関する連絡や報告は中国人の誰しもが使うSNSであるWe Chatを使用したり、何かの動画を見る際にはyoutubeではなくbilibiliというこれもまた中国人が愛用する動画閲覧サイトを使用した。このように授業全体を通して現地の生活を疑似体験できる環境がオンライン学習には創造可能であることはオンライン学習の「ここ」を共有できない欠点を少なからず補うものであり、その先駆者となれたことは意外かつ貴重な体験であったと感じている。

研修を通して抱いた感想の2つ目は伝える努力の大切さだ。南京研修は授業や交流中は一部を除き基本的に中国語で全ての質問・回答・意見交換が行われた。自身の言語能力の乏しさゆえ、伝えたい内容が日本語で頭の中にあっても、なかなかそれを中国語を用いて言語化するという一步を踏み出せない時が多かった。しかし、勇気を出して発言をしてみるとそれがたとえ些細なことでも中国人の方々は喜んで聞いてくれたし、例え上手く表現できなくても必死に理解しようとしてくれた。言語は何か自分の中に伝えたい気持ちがあってそれを伝達する手段として生まれた。したがって人は気持ちありきなものであり、例えその言語が拙くてもきちんと伝えたい内容があり、またそれを伝える努力をすれば必ず相手に届く。これは中国語に留まらず人との交流全てに当てはまるものであり、これを糧にこれからも多様な外国人との交流に勇往邁進するつもりである。

1-2. 第2回交流（8月14日）

前田 未来

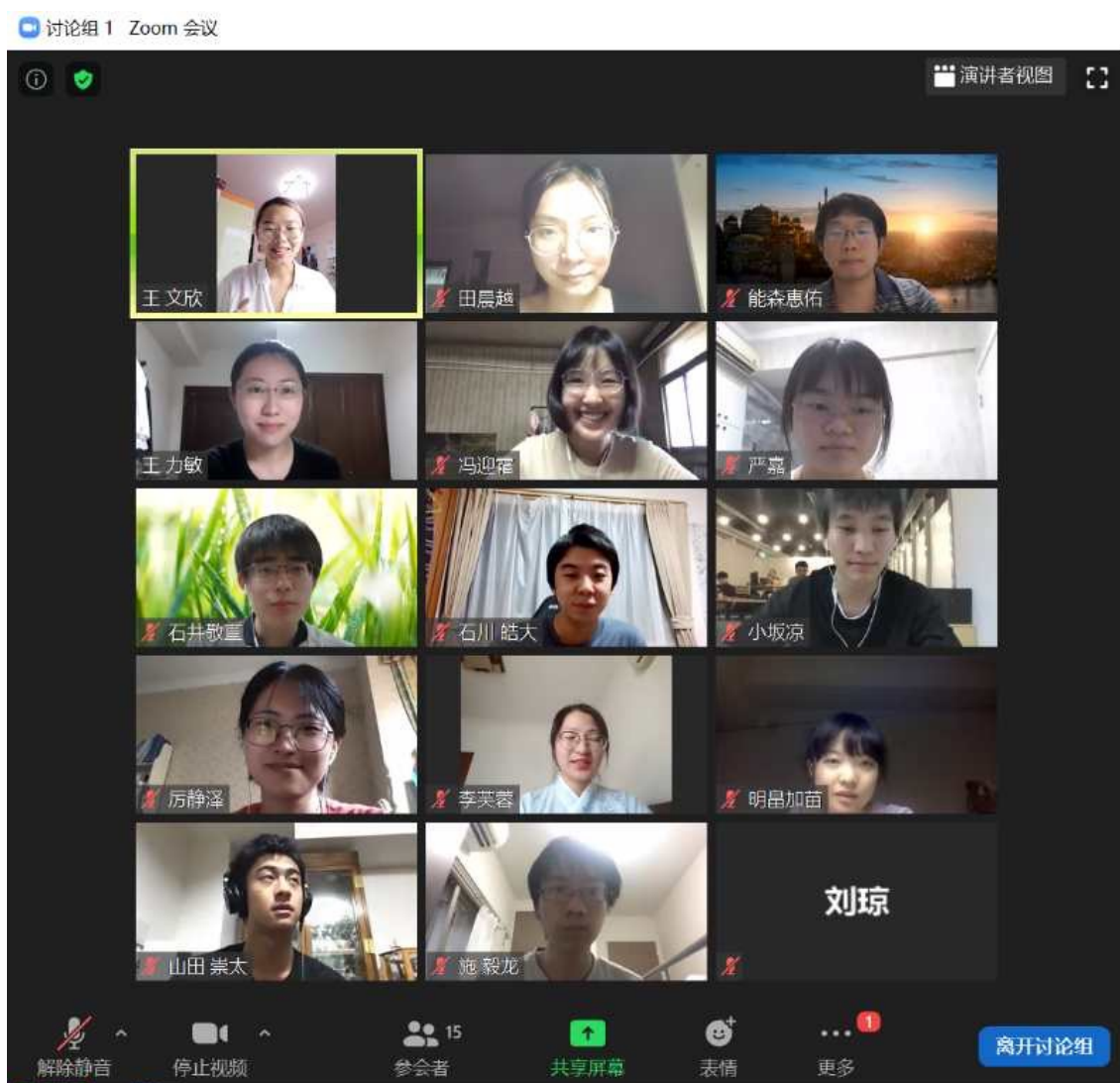
8月14日、私たちは南京大学の学生らと第二回の交流会を行いました。テーマは、第一回の「中国食文化」の続き、及び「中日茶文化」でした。二班の交流会では、まず南京大学の学生たちが用意してくれた発表を聞き、それを踏まえて簡単なディスカッション及び質疑応答が行われる形式をとりました。

「中国食文化」のプレゼンテーションでは、中国の「八大菜系」が解説され、各地方における味の特徴や有名な料理が順に紹介されました。ここで、南京の学生が私たちにどう中国の料理を知っているかと聞いてきたので、何人かが麻婆豆腐、青椒肉絲、肉まん、回鍋肉、などと日本でよく食べるものを挙げてきました。すると、意外なことに、発表をしている大学生が「青椒肉絲って何？」と聞いてきて、こちら側から説明する流れになりました。茶の文化の紹介でも、発表ででてきた中国六大茶類のうち、白茶とはどういうものかと東大の学生が質問したところ、「自分たちも飲んだことがない」という答えが返ってきました。また、発表中には中国の文化だけではなく、それに対応した日本の風習や伝統も紹介されました。中国の茶文化に対して、日本には抹茶及び和菓子の文化があるという話がありました。ここで南京大学の生徒が私たちに「抹茶とか和菓子は毎日食べているの？抹茶たてられるの？やり方説明してほしい」と聞いて来ましたが、誰一人うまく説明することができませんでした。当初は「中国人なのに青椒肉絲食べたことないって」と、少し思っていました。自分たちも日本文化について聞かれたら案外知らないことが多いのだと改めて反省する機会となりました。他の回でも、「日本の初詣ではどういうことをするのか」と聞かれ、全く答えられなくて悔しい気持ちになったことも今も鮮明に覚えています。他の文化を知るには、まず自分の文化を理解していないといけません。これはよく聞くことですが、今回の南京大学生との交流及び討論で痛感したことでした。

討論の全体的な印象として、南京大学の学生が素晴らしい発表を用意してくれたので、話の内容も尽きず、楽しく交流することができました。もちろん、中国語でうまく言いたいことを表現できないことも多々ありましたが、自分の言

いたいことが相手に伝わり、「なるほど！」と言われたときにはとても嬉しく感じました。また、発表していた大学生の一人は日本語を少し話すことができたので、私たちが言葉に詰まったときに助けてくれました。

言語や文化で隔たれている学生同士ですが、このような機会を通して互いのことを理解し合おうとする試みというのはとても重要だと感じました。連絡先も交換できたので、定期的に連絡を取り合っていきたいと考えております。



東大・南大学生交流の様子
(撮影・王文欣 2020年8月)

1-3. 第5回交流（8月24日）

能森 恵佑

5 回目の南京大学の学生との交流では南京大学の学生が中国の伝統行事や記念日について紹介してくださった。具体的には壮族の三月三、孔子の生地である山東省曲阜で行われる祭孔大典、モンゴル族のナーダム、チベット族の酥油花灯節、イ族の火祭り、タイ族の水掛け祭りといった伝統行事である。そして最後には中国のネット上で生まれた新たな記念日であるネット上のバレンタインデー（5/20,21）と独り身の日（11/11）について紹介してくださった。これまでの南京大学の学生との交流では春節や清明節、重陽節など中国の農暦上の祝日の紹介が主であったが、今回は漢族以外の少数民族の伝統行事に関する話が多く、どれも個性的で強く興味を惹かれた。こういった南京大学の学生との交流で、私は日本文化への理解度の低さを痛感した。例えば今回の交流では南京大学の学生から日本にはどのような伝統的な祭祀があるか質問されたが、具体例が思いつかず何も答えられなかった。これは日本語で質問されていても言葉に詰まっていたと思う。自国の文化に対する一定の理解があつてこそ、他国の文化と自国の文化との差異がわかるものだ。これからは日々の生活で日本の伝統文化を素通りせず立ち止まってみようと思う。

この南京研修は語学との向き合い方を考える機会になった。こう書くと大袈裟に聞こえるかもしれないが、その内実は決して立派なものではない。私はこれといって興味のある学問分野のないままなんとなく大学に入ってしまった自覚がある。そんな私が唯一大学入学前から楽しみにしていたのが語学であった。そのため大学入学時にはもちろん TLP に応募した。幸い私は TLP の受講が許可され、この南京研修にも参加が許可された。中国語学習は少なくとも私にとって常に「楽しい」ものであった。しかし、この南京研修が始まるまで私は「楽しいから」といった理由以外でなぜ中国語を勉強するのか自分で言語化できないでいた。また、この 3 週間中国語と向き合う中で私は自分の将来についても向き合わざるを得なかった。それは東大での後期課程の学部を決める期限と重なっていたことも理由である。私はこれまで大学で頑張っている中国語をどう将来に活かそうとばかり考えていた。「言語はツールである」という言葉が大学入学以

来常に私の上へのしかかり、中国語を使って何かできるようにならなければいけないとばかり考えていたのである。しかし、南京研修を終える頃にはこの考え方は中国語に縛られすぎているのではないかと感じるようになっていた。私が中国語を大学で選択したのは自分の意思であり、決して消極的な選択ではなかった。その理由は台湾の Youtuber が好き、漢字が好き、好きな映画の中国語吹替版の音が好きだといった積極的なものであり、中国語ないし中華圏の文化に多少なりとも興味を持っていたからである。この南京研修で南京の史跡や歴史について学び、南京に限らず中国の各地域の伝統文化に触れるにつれて私は中国の雄大さを画面越しにはあるが強く感じ、まだまだ知らないことばかりの中国文化について知りたいと思うようになった。「中華圏の文化について理解を深めたいから中国語を学ぶ」一動機としては幼稚かもしれないが、それでも中国語を学ぶ目的を初めて自分なりに定義できた気がする。私は大学の後期課程で何を勉強するかまだはっきり決めきれてはいないが、中国を直接の研究対象としなくとも私は中国語を学び続けるつもりである。そしていつか必ず南京を実際に訪れ、画面越しでしか見ていない南京の街をこの目で確かめこの足で歩きたい。



南京大学校内（撮影・菊池真純 2019年8月）

1-4. 第6回交流（8月28日）

原田 紗来

第4回目、南京研修最終日に行われた中日大学生交流では、中国と日本の様々な風習の違いについて、中国の学生からプレゼンが行われた。

まずは伝統的服装の話である。中国の伝統服には赤などの暖色が多く用いられ、目立って豪華であり、日本の和服に黒や青、茶色などが多く用いられ、自然の色を表しているのと対照的である。中国の服は着る人の美しさを、和服は自然の美を表現することに注力しているという。

中国の学生から和服について質問され、日本の学生が少し話をした。東大の学生が成人時の振袖の写真を見せ、中国の学生は「とても綺麗」との感想を述べていた。また、着付けに時間がかかるという話や、男性の和服、和服と浴衣の違いなどについても話題にのぼった。

その後、南京の中国服店のビデオを見せていただいた。中国服は客の体にぴったり合わせるため、精密な測定と裁断が必要になる。ビデオの店の主人が口から水を吹き出して布を湿らせ、その上で裁断するのが少し衝撃だった。

次に、制服と食事の話をした。中国の学校の制服は日本の体操服のような見た目である。中国では日本の制服を真似た可愛い制服風の服がネット上で流通しているようだ。

食に関しては、米を食べることが両国共通であるのはもちろんだが、魚も中国でもよく食べられる。栄養価が高く、福がある食べ物とされているからだ。一方、水の関しては日中で逆の文化がある。日本人は冷たい水、中国人は熱い水を好むのだ。背景としては、中国では日本ほど水道水が綺麗でなく、煮沸する必要があること、古くからの茶文化、冷やすと体に悪いという風潮があるそう。

続くのは、中国の伝統的住居の話である。土楼や横穴式住宅、バルが紹介された。土楼は1000年の歴史をもつ土の集合住宅で、70メートル以上の直径を持つものもあり、700~800人が住める。黄土高原の土壁に横穴を掘って家を作るのが横穴式住宅で、バルはモンゴルの布でできた、軽く、自然環境に適し、持ち運びが簡単な移動式住居である。

ここで日本家屋について（和室や畳、障子など）東大生から説明があった。その後、「中日の若い人は家を買うか借りるか？」についての議論があったが、両

国とも都心部では値段が高いから買うことは難しく借りることが多いという結論になった。

交通機関の話も触れられた。日本では電車や新幹線、中国ではバイクなどが多いようである。(新幹線の乗り心地について尋ねられた東大生曰く、新幹線は「马马虎虎」であるとのこと。)

最後に、花火大会についての話を少しして、交流会は終了となった。どの会についても言えることだが、中国の学生が用意してくださったパワポや映像がとても綺麗で、見ていて楽しく、とても充実していた。中国の文化についてよく知ることができ、大変よく準備してくださった中国の学生の方々に感謝している。



東大・南大学生交流の様子
(撮影・王文欣 2020年8月)

2. 田家炳高校生徒との交流

2-1. 第1回交流（8月18日）

柳田 堯紀

オンラインサマースクールも二週目に入り、慣れてきた頃に南京の田家炳高校と交流した。個人的には高校三年生以来二年ぶりの高校生との交流だったので、とても楽しみだった。

この交流活動では、私たち東京大学の学生は普段通り自宅から参加したが、高校生たちは高校の一つの教室の中に集まっていた。第一印象は、「誰もマスクしてない！」である。南京はウイルスの封じ込めに成功していると春先にニュースでみたが、隣の人とすぐ近くで笑いあっている高校生をみて少し羨ましくなった。

生徒の代表と校長先生の挨拶が終わった後、田家炳高校の校舎・施設や同校での生活を撮影した映像を少し見せてもらった。驚くべきことに、校舎の壁に小さな絵があったり、ちょっとした空いているところにまさに「中国風」な小さな東屋があったり、日本の高校とは雰囲気が大違いであった。広い校庭や、秀麗な洋館風の外観、広くてゆったりとした図書館を見て、こんな場所で十代の後半を過ごしていたらきっと心が豊かになるだろうと感じ、実際に発表の内容や交流からそれをうかがい知ることができた。また、他の東大の参加者も感銘を受けた様子でうなずいていたり、zoom のリアクション機能で拍手を送ったりしていた。

その後、東大生の簡単な自己紹介を経て、南京の学生からの「質問タイム」があった。質問は二題で、一つ目が「東大の魅力はどこか?」、もう一つが「南京に行ったら見てみたい場所」であった。一つ目の質問に対しては四名の学生が「勉強するだけではなく、色々なバックグラウンドの人と交流を持てる場所」「留学生、特に中国人留学生が多いこと」「進振り制度のもとで二年間は教養科目を学べること」「本郷キャンパスの近くには中華料理店もたくさんあること」などを挙げていた。二つ目の質問に対しては、南京城や中山陵など歴史に関する名勝古跡が上がっていた。この質問タイムでは、事前に準備していた人とは別の人が指名されていたが、どの参加者も丁寧に対応していて、発言しなかった私としてはレベルの高さを痛感した。

続いて、休憩を挟んで田家炳高校の学生による発表が行われた。順に「南京の

“住”「南京の”食“」「南京の交通」「南京の生活」を紹介してくれた。「南京の“住”」ではさすがに古都でだけあって歴史がある街なみを紹介していた。また、道端でゲームに興じる中高年の姿も動画でうつっていたりと東京とは随分違った様子であった。道を歩いていた人はどこかゆったりとしていて、動画を一見した印象ではのんびりと時間が流れているように思えた。一方で、その街の外には特に現代的な建造物が見えた。玄武湖から遠くに見える高層ビル群は壮観だった。

「南京の”食“」では、いくつか南京の有名な食べ物を紹介していたが、どれもとても美味しそうに思えた。これは「南京の”食“」に限らずどの発表にも言えるが、とにかく南京の高校生は動画やスライドを魅せるのがとてもうまかった。(そもそもこの交流のために一組一本動画を撮っているところからして彼ら彼女らがこの交流をどのように見ているかが伝わる気がした。)食べ物も見た目や味など注目して欲しいところをはっきりと示し、自分の文化を上手に伝えていたように思う。それができるのも日常的に衣食住や生活の文化に主体的に接しているからであろうし、そこは彼らの強みだと思った。反対に私自身のことを考えると、日本の文化に対する理解は深くないことを痛感させられた。ましてや高校生たちのように「映える」ように日本文化を紹介することはできないと思った。どんなに日本の文化を彼らにわかしてもらおうとそれを伝えようとしても、それが相手に伝われば「伝える気があまりない」と捉えられても全く不思議はないので、彼ら彼女らの熱量には見習うところがたくさんあると感じた。

「南京の交通」「南京の生活」では、高齢者の「朝活」や屋台、現地のショッピングモールなどを紹介していた。朝活ではジョギングからヨガのようなものまで幅広い活動が行われていた。観光客など外から来る人には「よそいき」に見える場所でも現地の人にとっては生活の場だということがよくわかった。また、WeChat の QR コードを使ったレンタサイクルのシステムはとても興味深かった。管理が大変な側面もあるようだが、とても便利そうだった。

今回の交流はオンラインというなかなか体験できないものであった分、オンラインだからこそできることや対面でしかできないことはそれぞれ何だろうかと思うことが多かった。その中で感じたのは、オンラインの方が熱意を感じやすいかもしれないということである。南京の高校生が意欲的だったのはもちろんのことだが、それ以上に全員が画面を注視したり綿密に準備された発表をしたりしていた様子には心を動かされた。オンラインで相手の意見や感じ方を理解

しにくいからこそお互いに傾聴しあったり疑問をぶついたりしていてとても楽しかった。この経験はコロナが収まった後も印象に残し続けなければならないと感じた。そしていつか必ず南京、または中国へ行って画面でしか見られなかったものを肌で感じたい。



画面越しに東大生と議論する田家炳高中生徒たち
(撮影・田家炳高中 2020年8月)

2-2. 第2回交流（8月25日）

熊木 雄亮

8月25日午後、田家炳高校との2回目の交流が行われた。偶然にも当日は中国の旧暦の七夕にあたり、交流は中国と日本の七夕の伝統や寓話についての話から始まった。元来、七夕の寓話は中国から伝来したものであるため、中国人も日本人もほぼ同一の習慣や伝説を共有しているように私は感じる。

交流2日目の前半は、東大生から高校生に向けて、東大のクラブ・サークル活動、日本独特のおやつ、東京で楽しく遊べる場所、外国語学習の進め方、そして新型コロナウイルスの影響でキャンパスに行けない今年の我々の生活についての紹介をした。オンラインでの交流は、複数人が同時に意見交換をすることが難

しい一方、PowerPoint などを使って何かをわかりやすく解説できることが強みだと感じた。東大生はそれぞれ事前に準備したイラスト豊富なスライドを用い、それぞれの発表の後には高校生の方から質疑応答の時間が設けられ、巧みに双方向の交流を行うことができた。私自身も他の東大生が紹介した内容はとても興味深かった。私自身知らなかったみかん愛好会には中国の高校生たちも興味を惹かれただろう。日本独特の鯛焼きやかき氷などのおやつは二人の発表者による会話形式で紹介され、その面白さからオンラインであっても効果的に場を和ませていた。東京の観光地については、伝統的な面影を有する浅草寺から若者に人気の渋谷まで幅広く紹介され、外国語学習については、語彙力を増やす必要性や、時間をかけて語学の4技能を懸命に磨いていくことの大切さなどを私自身も改めて痛感させられた。最後の在宅生活の紹介については、気軽に外出できないといった欠点や、睡眠時間の増加、通学の必要性からの開放といった意外な美点など、我々がなんとなく感じている様々な生活の変化について改めて確認することができた。高校生からの質問も興味深く、浅草寺などにある日本独特のおみくじ文化についての鋭い質問から、在宅授業に限らず大学の授業では眠気を感じるのではないかとといった和やかな質問に至るまで、様々な質疑応答が見られた。

続いて、田家炳高校から、玄武湖、そして中国四代名楼である黄鹤楼・岳陽楼・

勝王閣・鶴雀楼について紹介があった。玄武湖の水面には蓮が広がり、その周りには歌や踊りを興じる人や運動を楽しむ人、そして色とりどりの美しいビルがそびえ立っている様子がスライドを通じて見られた。中国四代名楼については、日本語の注釈のついた動画を用いて建物内部まで詳しく説明された。田家炳高校の生徒は、長い時間をかけて勉強してきたとはっきりわかるほど日本語が上手で、東大生みなが驚いていた。あれほど日本に興味関心を抱き日々勉学に励んでいる高校生と交流できたことは大変嬉しく光栄なことであり、自身もぜひ中国語学習を続け中国をより深く理解したいと強く感じられる機会だった。最後は田家炳の生徒一名が古筝を披露してくれた。Zoom 越しでもその伝統的な音色は荘厳で大変美しかった。現地で直接音色を味わうことができなかったのが残念である。

今回の研修は、コロナウイルス感染拡大の中での前代未聞のオンライン形式であったが、先生方による入念な研修計画、東大・田家炳高校双方の準備のもと、質疑応答を交えた双方向の交流を行うことができた。研修を通じて得た中国に関する知識や中国へのさらなる興味、さらにはオンラインの活用経験を、今後の大学生活に活かしていきたい。



画面越しに東大生と議論する田家炳高中生徒たち
(撮影・田家炳高中 2020年8月)

3. 中国語講演

3-1. 「中国の文化保護政策」南京大学政府管理学院・姚遠 副教授（8月13日）

米原 有里

1. 文物と文化遺産について

中国では「文物」という二文字を同時につかった文書としては『春秋左氏伝』が初めてである。『春秋左氏伝 桓公・二年』にその記述が見られる。『後漢書・南匈奴伝』には「制衣装、備文物」との記述が見られる。以上の文書での「文、物」とは、もともと当時の礼楽典章制度を指すもので、現在の文物の意味とは異なる。

唐代に入ると、杜牧の詩をはじめ詩においての「文物」という語句の使用が見られる。ここで使われている「文物」は現代語における「文物」の意味と近く、前代の遺物を指す言葉である。

世界各国では文物に対する異なる分類が存在し、それぞれの国で使われている語句があるが、全世界的に全てを総括する文物の総称はない。

欧州では17世紀の英文書と仏文書はAntiqueという語句が使われている。Antiqueの原意は古代の、前の、という意味がある。

日本語では有形文化財という語句が使われており、中国の文物と似たようなものを指す。

2. 中国文物保護の歴史

1930年に国民政府は「文物保存法」を發布し、合わせて中央古物保管委員会が成立した。これは、中国の歴史上で中央政府公布した初めての文物保護法規と初めての国家成立の専門保管管理文物の仕組みだ。1929年には中国营造学社が創建され、30年代には組織専門家が各地の古代建築に対して、実地調査研究や文献資料の整理等をした。1949年に中華人民共和国が成立した際には中国の文物保存に対する新しい研究段階に突入した。五十年代初頭には中央人民政府は文物保存のための法令等を發布し、1840年代以来の重要文化財が海外に流出している現象に歯止めをかけようと法を発付した。

中国の文物保護制度には以下のようなものがある。

- ・ 世界文化遺産
- ・ 文化保護単位
 - ・ 全国重点文物保護単位
 - ・ 省級文物保護単位
 - ・ 市具級文物保護単位
- ・ 歴史文化名城
 - ・ 国家級歴史文化名城
 - ・ 省級歴史文化名城
- ・ 歴史文化街区

しかし、1950年代の「拆除城牆」、1966年「破四旧」、21世紀の拆毀歴史文化街区など、現代中国では文物の破壊が度々起こっている。現在は習近平政権のもと、文物の一層の保護が推進されている。

3. 案例研究：南京

南京の古都は、明実録を始めその魅力が記録に残っている。しかし、拆除城牆で破壊された歴史ももつ。

感想：文物という言葉自体に馴染みはなかったが「文物」という言葉についての意義や歴史、そして多くの文化遺産がある中国の文物保護に関する歴史や現在の取り組みについて、南京大学の教授の授業という形で学ぶことができてよかった。世界では文物を保護する動きが主流である一方で、度々文物が破壊されてしまうことがあることについて考えさせられた。

3-2. 「南京の歴史文化及び南京博物館の紹介」南京田家炳高中・施江副校長（8月20日）

施 毅龍

施江先生に南京の歴史や文化などについて講演していただいた。

まずは南京の地理についてである。人口 850 万人、教育研究や交通の重要な拠点となっている中国東部の都市である。また地形的にかなり特徴的である。紫金山などの山に三方を囲まれ、もう一方は水に面し、揚子江が流れ込む。この地形は軍事的にも重要な役割を果たした。

続いて南京の歴史である。南京は 6000 年以上の文明の歴史と 2500 年以上の都市の歴史を持ち、中国四大古都の一つに数えられている。5,600 年の歴史を示すものとして北陰陽宮遺跡などがある。紀元前 495 年には冶城が建てられている。そして三国時代に孫権が首都を南京に移し都市としての歴史が始まった。この時代には邪馬台国との交流もあった。その後、東晋や南北朝時代の宋、齊、梁、陳などが王朝を築き、世界初の 100 万人都市となった。宋の時代には当時の日本とも交流が深かった。南唐の時代も南京は首都であった。王の墓からは様々な埋葬品が発掘されている。そして 1368 年に成立した明の首都にもなっている。この時には 27 年の歳月に渡って明城壁が建設され、35 km の世界最大の城壁となった。歴史的にも技術的にも価値の高い明城壁は世界文化遺産となっている。1912 年には中華民国の首都となった。日中戦争時の様子は南京大虐殺記念館で知ることができる。戦後の発展は閱江楼、南京長江大橋、南京紫峰タワーなどの建造物から伺える。

続いて文学都市としての南京である。ユネスコは 2004 年に「クリエイティブシティーズネットワーク」を設立し、南京はそのうちの文学都市に指定されている。南京の文学の歴史は長く、多岐に渡る。例えば、『昭明文選』は南朝時代に編纂された中国に現存する最古の詩集であり、中国文学史の先駆けとされる。また、クラシックオペラにとっても価値の高い『桃花扇』は明代末期の社会の現実を表した作品である。他にも謝凌雲、李太白、唐仙津、曹雪琴、魯迅、巴金などなど、多くの作家や詩人が南京と関わりを持つ。南京は長い文学の歴史を尊重し、文化産業を発展させようとしている。南京には数千の文学協会が存在し、書店や出版社も世界的に著名なものも多く南京にある。南京は古代から現代に至るまで文学の最先端を担っていると言える。

また、南京博物館内の南京の歴史や文学の記録が見られる貴重な文化財を多く紹介していただいた。

私は講演前は南京についてあまり知らなかったのだが、この講義を受けて南京は中国の中心を担ってきたのだと実感した。様々な記録や文化財からも南京の栄えぶりが伺えた。また外国との交流にとっても重要な拠点だったことがわかった。そして文学についても栄えた都市の中で人々がどんな文学に共感し詩人や作家たちが何を遺してきたかに興味を持った。また古代から存在する貴重な文学が数多く残されており、現代の文学産業の大規模な発達も含めて重要な文学都市だと実感した。中国の歴史や文化において重要な位置を占め続けた南京について深く学ぼうと思った。



中国科学博物館（江南貢院）南京市秦淮区
（撮影・菊池真純 2019年8月）

3-3. 「中国の社会的弱者～社会的支援と教育～」 南京大学社会学院・賀曉星教授（8月27日）

石井 敬直

講演の概要

賀曉星先生に「中国の社会的弱者～社会的支援と教育～」という題でご講演頂いた。今回は社会的弱者の中でも特に聴覚障害者の社会的支援と教育の問題についてお話しいただいた。中国には障害者が8500万人おり、その中の2075万人が聴覚障害を持っている。これらの人々は社会生活の中で様々な困難を抱えており、聴覚障害のため健常者の社会から疎外されてしまう場合も多い。これまでも中国障害者連合会や聴覚障害者教育などが行われてきたが、問題の根本的解決には至っていない。

まず従来の中国における聴覚障害者教育の特徴を説明する。今までの聾学校では聴覚障害者が健常者の社会で円滑に生活できるよう、読唇力と発音力を鍛える教育をしてきた。よって授業では新事項を学習する際にその都度読唇や発音の練習をしなければならないため、学習進度が健常者に比べ大幅に遅れてしまう。結果として学力に大きな差が生じ、大学進学率や就職先に直接響き、社会的な地位や金銭の面で健常者の平均を大きく下回ってしまっている。例えば聾学校の教師を例にとると大部分が健常者であり、聴覚障害者が占める割合はごくわずかである。これは学識が高く言語能力も高い健常者の方が教師に適していると思なされるためである。

この他に聴覚障害者が健常者社会に溶け込みにくい原因としては、聴覚障害者の社会の文化と健常者の社会の文化の差異がある。聴覚障害者は聴覚が使えないこともあり視覚優位な文化になっている。例えば中国では手話は自然手話と文法手話の二種類ある。名前から容易に想像できるが、自然手話はカジュアルな場面で用いられる手話で、文法手話はオフィシャルな場面で用いられる手話である。文法手話が中国語の文法に則っており、一語ずつ前から動作で表現していく連続性や時間制を持つ言語である一方で、自然手話の文法は視覚優先の原理に則っており、動作だけでなく表情も豊かに用い、空間性を持っているのが特徴である。自然手話は聴覚障害者が自然に用いている手話である反面、文法手話は健常者の社会に即したもののなので、聴覚障害者の中には文法手話が苦手な人が多い。

以上、聴覚障害者の教育や文化について述べてきたが、このような問題がある中でどのように聴覚障害者の地位向上を図るべきだろうか。もちろん、健常者が聴覚障害者やその独自の文化を理解、尊重することが前提にある。賀暁星先生は現実的かつ有効な方法は、聴覚障害者の社会の文化が最も現れている自然手話の魅力を知り、勉強することだと仰っていた。自然手話の魅力としては、国や地域による差異が比較的小さいため国境をまたいで意思疎通ができることや習得が容易なことがある。自然手話を普及させる具体的な方法としては、自然手話を大学の授業の一科目として設けることなどが行われている。このような取り組みを経て健常者が自然手話を習得することで聴覚障害者の社会参画が容易になり、さらには聴覚障害者と健常者の文化の相互理解につながると考えられる。

個人の感想

私はこれまでの人生で聴覚に障害がある方との深い交流がなかったこともあり、賀暁星先生の講演を聞くまでは聴覚障害について真剣に考えたことがなかった。ただ、今回講演をお聞かせ頂き聴覚障害者の文化、特に自然手話に興味を持てたとともに、これまでの自分の聴覚障害に対する無関心な態度が、聴覚障害者の生活の障害になっていたことを認識できた。健常者は障害の原因を障害者の身体にあると考えてしまうことが多いが、実は最大の障害は障害者の身体にあるのではなく、障害者を取り巻く環境、とりわけ健常者の意識の側にあることの方が多い。聴覚障害者の場合も例外ではなく、私たちが聴覚障害者を理解しようとし、コミュニケーションを取ろうとする姿勢こそが聴覚障害者の最大の支援になるのではないかと感じた。

印象記

4. 中国語授業担当教員（南京大学）からのコメント

4-1. 李宇晨（1 班教員）

東京大学の学生の皆さんへ

瞬く間に、三週間の東京大学のサマースクールが終わってしまいました。しかし、学生の皆さんは先生に深い印象を残してくれました。王力敏さんと山田崇太さんは授業内で積極的に考え、進んで発言してくれていて、また中国語も流暢でした。明畠加苗さんは、始まったばかりの頃は恥ずかしがっていたのが、その後は勇気を出して自信をもって表現してくれるようになってくれていました。これは大きな進歩です。

小坂涼さんと石井敬直さんは発表の準備が非常に良く出来ていて、PowerPoint も精巧で彩りよく、文法知識の基礎も非常にしっかりとしていました。能森恵佑さんは言葉の組み立て方と表現能力が抜きんでいて、問題を考えるときの観点も独特かつ斬新なものでした。施毅龍さんは班長を担当してくれて、中国語の勉強をしながらも、仕事の管理も立派にやりきってくれました。石川皓大さんは中国語の基礎はよく出来ていたのですが、途中で風邪をひいて授業に出られないことがあったので、勉強と同時に体の健康維持にも気をつけてください！最後になりますが、学生の皆さんの学業成就・身体健康をお祈りしています。何かの機会で皆さんと南京大学に集まれるよう願っています！

担当教員：李宇晨

2020 年 8 月末

日本語訳・山田 崇太

4-2. 杭蓄（1班教員）

授業の感想

今年、東京大学の学生たちと一緒に中国語を学ぶことができ、非常に光栄でした。この暑い夏に私が得られた、最も素晴らしい収穫でした。

私が担当したのは1班の総合中国語の授業でした。第1回の授業の時にはもう、学生たちの中国語のレベルの高さ、その美しさに驚かされました。発音は正確ではっきりしており、漢字の知識量も、このレベルの学生が有するはずの知識量を上回っていました。このことによって、毎回の授業をととても順調に、気持ちよく進めることができました。それと同時に、学生たちの理解力も非常に素晴らしく、吸収力もとても良かったので、とても多くの単語や文法ポイントをすぐに理解し、練習で作った文章にも基本的に間違いはありませんでした。この学生たちに授業をするのは、私にとって一種の楽しみでした。授業後の宿題に至っても、学生たちの態度は真面目であり、少しもおざなりにせず教師の要求に達し、しばしばその要求を超えることもありました。作文の字も整っていてきれいであり、非常に添削がしやすいものでした。最も重要なことは、作文の質が非常に素晴らしかったということです。

東京大学の学生たちは、自分自身に対する要求も極めて高く、よく質問をし、それらの質問はすべて大いに価値があり、考えさせられるものでした。学生たちが提出した宿題を見ても、ただ教師から課された課題をこなしているのではなく、学生たちが世界や自分自身に対する考え方を一文一文に込めていることが感じ取れました。中国語というなじみのない言語を使いながらも、学生たちには、表現をしたい、自分の考えを世界に発信したい、という欲望があり、それが、ただひたすらに勉強するための最大の原動力になっているのだと思います。このような学習の精神に、私は深い感銘を受けました。学生たちと交流する中で、私自身もまた成長していることを感じ、新しいものの見方や、自分一人では得られると思っていなかったような知識を多く得ることができ、以前は知らなかった日本の文化についても知ることができました。

言語面が原因なのか、学生たちはいくらか恥ずかしがっていましたが、それでも可愛かったです。学生たちが真剣に発表をしているときの表情や、私に送って

くれた、ひとつひとつの「ありがとうございます」のメッセージ、すべて心に残っています。学生たちのお陰で、勉強というのは面白く、また輝かしいものであるということを、私は更に深く感じることができました。また、言語教育の魅力にも気づかされました。というのも、言語学習においては、異なる文化を持った二つのグループがコミュニケーションをとり、お互いから学びながら、共に成長していくことができるからです。私は学生たちが私を尊重してくれているのを感じることができ、学生たちのお陰で、私は自分が教師をしているということの意義と価値を感じるようになりました。それゆえ、学生たちには深く感謝しています。学生たちは、私にとって友達でもあり、みな常に感謝の心に満ちた善良な方々でした。

3週間という時間はあっという間に過ぎ去りました。授業が終わるとき、私は非常に名残惜しく思いました。今後またみなさんと会い、いっしょに交流し、いっしょに勉強できることを願っています。

出合いがあれば別れもあります。名残惜しいですが、それでもお別れしなくてはなりません。皆さんの前途に幸多く、すべてがうまくいくこと、皆さんが健やかに過ごされることをお祈りしています。また会いましょう！

杭 蕾

日本語訳・石川 皓大

4-3. 劉璐（2班教員）

授業の感想

3週間にわたる東京大学の夏期中国語プログラムが無事に終了しました。私は2班の中国語の会話授業を担当し、教師として中国語を教えるばかりではなく、2班の皆さんとの交流を通して非常に多くのことを学びました。この3週間の中で、私たちは「性格」、「試験」、「職業」、「プレッシャー」、「携帯電話」や「インターネット」などのトピックについて話し合い、その綿密な議論の中で、私は生徒一人一人の考え方や信念を知ることができました。

また、2班の9名の生徒は皆、一生懸命に取り組み、丁寧かつ慎重で、自ら問題提起や質問ができ、しかも他者と異なる意見を述べることに尻込みしませんでした。これは私が、中国語の会話授業はこうあるべきだ、と考えるまさにその様子でした。それに、生徒たちはとても礼儀正しく、私にとって授業の時間は格別に楽しいものでした。

私は彼らから、様々な観点から自分を見つめ直すこと、社会問題の捉え方や、ある現象について考えフィードバックを与えること、さらには他人や自分の人生に向き合う姿勢を持つことを学びました。

優秀な2班の生徒たちが皆、自らの理想を諦めることなく貫き、何事にも真剣に取り組み、輝かしい未来を切り拓くことを心から祈っています。

劉璐

日本語訳・王 経博

4-4. 王大瑩（2班教員）

東京大学の生徒たちとともに過ごした三週間、私はずっと自分はとても幸せだなあと感じていました。幸運にも、このような優秀な生徒たちのグループに出会えましたし、彼らは真面目で、努力し、謙虚で、考えの有る者たちでした。彼らは、ただ中国語の知識を学ぶだけではなく、さらに中国文化に対する深い興味があり、また、日中二カ国の社会問題のいくつかに対して深い考えや、独自の見解を持っておりました。私自身もまた、このような講義で勉強になり、日本の文化や教育に対するさらに多くの理解を得ました。だから、実のところ私は、生徒たちに感謝しており、彼らの授業中での発言やその時々提出する課題、また暖かい笑顔に感謝しております。

三週間は慌ただしく過ぎ、名残惜しく、期待もございますし、素晴らしい思い出だってあります。皆さんには中国語をよく学び、人生における目標を実現し、同時に日中二カ国の友好のために微力を捧げてもらいたいと思います。自分たちの夢が前進し、麗かな青春時代をおくれますように。

王大瑩 2020. 8. 29

日本語訳・Y.T

5. 参加学生の感想

5-1. 「サマースクール、概要と言語学習の教訓」

浦 彩人

本研修の選抜試験が行われ、無事研修参加が決まった際には、期待よりも不安のほうが大きかった。というのも、2年生以降の中国語学習に手ごたえが感じられず、全てが中国語で行われる本研修を最後まで遂行できるのか、そのような環境下で中国語の力が伸ばせるのか、もしもこの研修が徒労に終わってしまったら…という焦燥感が大きかったのだ。

開講式では、双方大学から南京大学、東京大学両者の努力により本研修を敢行できたことへの感謝、生徒と教師の距離が近いなどオンラインだからこそ実現できる教育について、最後には三週間中国語を学習する生徒に対する激励の言葉が寄せられた。双方大学からのコメントの後、南京大学の歴史、についてスライドを以て紹介された。南京大学のマスコットキャラクター“小藍鯨”が非常に可愛いのが印象的だった。また、キャンパス内の風景を映像ないしイラストで紹介している際には西洋に習いレンガ建ての建物が非常に多い東京大学とは異なり中国の伝統的な様式の建物も見られることに感嘆すると同時に、オンラインではなく実際に訪れてみたいと心から感じた。その後南京大学の学生生活、部活などの活動内容を紹介された後修了式は幕を閉じた。なお今回の南京サマースクールすべてに共通することだが、問題点としてスライドに映像を用いる際に音声とぎれとぎれになってしまい聞き取れなかった。次回以降もしオンラインでの開催があれば映像ではなく音声のみを用いるのが望ましいだろう。

授業に入ると、教員は生徒が学習済みの単語を用いて新出単語を説明、生徒の発言の単語から文脈を予想し整理し再度生徒たちに説明するなど3週間の間親身になって対応してくださった。また、教師によっては毎度提出する課題に逐一添削をして返却、最終日には自信のスマートフォンで南京の街並みを撮影しながら紹介したりなど、オンラインでありながら現地での体験を最大限想像できるような工夫をほどこし、最後まで楽しくかつ濃密な授業を受けることが出来た。

午後からは中国の歴史や文化、風習などを南京大学の教諭生徒から教えていただく授業、そして現地高校生との交流があった。現地高校生との交流ではその日本語の流暢さに舌を巻くと同時に丹念に準備したスライドや動画の数々に感謝、実際に会い交流したいと切に思った。

修了式では、南京大学からオンライン学習による学習量の減少という危惧を乗り越え生徒たちが勉学に励んだこと、そして一同機会があれば南京へ訪れて欲しいというメッセージが寄せられた。続いて東京大学からはオンラインでありながらオフラインと変わらぬ学習を実現できたこと、そして生徒たちがこの先も中国語学習を努力し続けることを願うメッセージが寄せられた。

以上で南京研修そのものは終了したが、この研修で私が得たものは「コミュニケーションは考えるよりやってみるほうがいい」ということ、そして「語彙が無ければどの技能も伸びない」ということだ。言語でコミュニケーションをとる際ネイティブ並みに完璧な会話をすることは理想的だが、それが他者との交流の必須条件ではない。発言を聞く人が教員や研修に参加する生徒だったというのもあるが、単語の羅列や文法的ミスがある発言でも意図をくみ取り確認を取ってくれることが多々あった。座学で学べることを実際の交流で活かすには声に出し交流する、それにより発話能力も上達するだろう。そして座学のアウトプット、他者との交流を活発にするためにも、語彙力は必須である。事実、私は午後の研修において教諭の説明が聞き取れず路頭に迷うことが少なくなかった。これは中国語の発音が聞き取れないのではなく、単語単語のピンインは比較的想像がついた。むしろ問題は文章中に未知の単語が多数あったことにある。来月には HSK の受験も控えており、少しずつでも語彙力を上げていこうと思う。



南京大学マスコット (出典：南京大学)

5-2. 「オンライン研修というあり方」

Y.T

「 Semesterで開講されるオンライン上の中国語の講義と今回のオンライン研修の違いは何か」という問いに対して、研修当初の私は答えることができなかっただろう。実際に中国に在住する先生方による講義を聞くということは生の発音に触れることを可能にする、とか、中国文化の理解が可能となる、といった回答はできたかもしれないが、これでは、東京大学の中国出身の教員がオンラインで中国文化の説明を踏まえて授業するということとなんら差異はないという反論が容易になされることが推察され、当然にオンライン研修が意義あるものであるということとはできないのである。

だが、オンライン研修が終了した今、私はたといオンライン研修であっても南京大学の先生方から教わった事実には重大な意義があると主張することができる。

第一に、東京大学の学生の水準や、日本の大学教育について熟知した東京大学教員と異なり、南京大学の先生方は、中国の水準で、外国人に対する中国語教育を施して下さったために、題材の展開の仕方の水準が今までに見ないものであった。例えば、王大莹先生の講義では、単語学習においてであってすらその単語から派生する自由な問いかけをなさり、具体的には、「人生」という単語について説明するにあたって、「貴方の人生の目標は何か」と言ったような趣旨の質問を投げかけ、答えさせるというように、文法や文章読解を主な目的とする講義であっても自分の意見をいかに主張しうるかということを含めて私が受けた講義に比べたら比較のしようのないほどに重視なさっていた。このことは、中国で、いや世界というべきかもしれないが、意見陳述能力がいかに必要であるかということを実感させた経験であると同時に、一つの内容を展開させていく術を学ぶこともできた経験である。

第二に、中国語を学ぶという目的ですら、教員から学ぶのではなくて自ら学んでいくという姿勢を見受けることができた。例えば、刘璐先生の講義では、授業時間のほとんどが生徒間の討論であった。ブレイクアウトルームで生徒たちがジェンダー問題などについて話し合わせ、その発表を促すということが先生の主な役割であった。日本においても、生徒たちが討論し、教員はほとんど口を挟まないと言ったような方法が取り入れられる場合が少ないとはいえないが、第二外国語学習といった場面で、これほどまでに生徒主体であることは私の経験上多くない。

以上より、実地研修ではなくオンラインであるということでのデメリットは確かにあるかもしれないが、オンライン研修であっても意見陳述・展開能力や、生徒中心型語学教育というような面において、普段の東京大学での講義とはまた違う良い経験ができたと思う。



南京大学正門

(撮影・菊池真純 2019年8月)

5-3. 「積極性」

山田 崇太

今回の南京サマースクールにおける主目的は、中国語習熟度の向上、および中国文化の理解であった。前者に関しては、この三週間の間、平日はほぼ毎日6時間（宿題等の時間を含めればもっと）を中国語に充てるという状況に身を置くことができ、家にいながらにして中国語漬けの日々を送ることができた。後者についても、交流に参加してくださった先生方および同学のみなさんが、相当な時間をかけて準備してくださったおかげで、伝統文化から現代文化に至るまで、様々な中国文化について知ることができた。

ところで、今回の研修に参加する中で、内容とは直接的には関係ないことではあるが、一つ気付いたことがあった。それは、「積極性をもつことは重要だ」ということである。今回はオンラインでの開講となったことで、相手方や参加生徒が自分の目の前にいるわけではないこと、ミュート・ビデオオフにしてしまえばこちら側の情報を完全シャットアウトできてしまうこと、ラグがあつてコミュニケーションがとりにくいことなどから、元々の性格が控えめな私としては、積極的に自己主張するにはなかなかハードルが高い環境であった。しかし、そんな中でも他の参加生徒は積極的に意見し、授業の内容や交流の進め方を改善していった。その姿に触発され、自分も積極性をもち、自分の周りの環境を良くしていくべきだ、と認識することができた。それ以降は自分からも積極的に意見を言えるようになった。またプログラムの後半では交流の際のプレゼン担当に自ら立候補し、日本の文化について紹介するという役目を果たし、好評を得ることができた（協力してくれた石川同学に感謝）。ある種やりづらい環境だったからこそ、重要なことに気付くことができた、ともいえる。

2Aセメスターからは専門の授業が始まる。私は工学部に進学する予定であり、これまで一年半の間お世話になったTLP中国語の枠組みからは外れることとなる。しかし、今後どのような進路に進むとしても、前述のような積極性が重要だということに変わりはない。今回このことに気付くことができたのは一つの収穫であった。また、当然ながら今後も中国語の勉強は続けていく所存である。改めて、このような貴重な機会を用意してくださった関係者の皆様に感謝を申し上げたい。

5-4. 「中国語学習への意欲」

明島 加苗

「2020年の夏、オリンピックの開催されていない東京でオンライン南京研修の授業を受講する」そう1年前の私に伝えても信じないだろう。新型コロナウイルスは、それほど大きく世界を、そして私を変えてしまった。南京研修が終了した今、それは決して悪い変化ではなかったように思う。

もともと私は中国語を熱心に勉強するタイプではなかった。恥ずかしながら、大学入学時に第二外国語として中国語を選択したのも「話せたらカッコよさそうだから、何となく」。自らの強い意志で中国語を選択し、熱心に勉強する他の中国語 TLP の学生には圧倒されることもしばしばであった。それが変わる転機となったのが新型コロナウイルスの流行であった。家での時間を過ごす中で中国語のドラマをインターネットで視聴し始めたことによって、ようやく中国語を学習したいという意欲が生まれた。6月、例年に遅れて南京研修の募集要項が発表されたときには、絶対に研修に参加しようと心を固めていた。オンラインでの開催で中国の文化を肌で感じることはできなくても、参加への気持ちに迷いはなかった。

オンラインでの南京研修は、語学力を大きく伸ばすことができる場であった。1年生のときにさぼっていたツケは大きく、昨年からは中国語を熱心に勉強してきたであろう他の学生に圧倒され、彼らの語学力と自分の能力を比較して落ち込むこともあったが、先生方が私の言いたいことを必死でくみ取って適切な表現に直してくださったり、予復習がしやすいような資料を WeChat で共有してくださったり、宿題に時間をかけて丁寧に添削してくださったり、はたまた間違いだらけのたどたどしい発表を大袈裟なくらい褒めてくださったおかげで、語学能力が向上し、いくらか自信を持って話すことができるようになった。また、文化を自分の身で体験することはできなかったにしても、この研修を通して中国の文化について詳しく知ることができた。研修に参加する前は、中国のドラマを見ることで中国での生活について分かったようなつもりでいたが、脚色のある現代のドラマを見ているからといって、(創作物ではなく実際の) 習慣や、文化の地域差や伝統文化については何も知らなかった。しかし、南京大学や南京田家炳高中の学生・生徒の皆さんとの交流において、豊富な写真や動画とともに

南京や中国の社会、生活、文化について説明してもらえたため、脚色ではない実際の社会や生活について知ることができ、地域特有の文化や伝統文化についても具体的なイメージを持つことができた。

南京研修を通して、今後も中国語や中国の社会、文化を学んでいきたいという思いが生まれた。TLP のプログラムは終わりとなっても、中国語学習や中国社会についての学びに終わりはないのだ。私の語学力はまだ不十分であり、中国には私が未だ知らない文化がたくさんある。中国について専門として学ぶ予定はないが、これからも教養として中国語や中国文化を学んでいきたいと考えている。

最後に、このような社会状況の中で語学能力を向上させる機会を設け、整えてくださったこと、本来中国語を熱心に勉強したい学生の集まりであるはずの中国語 TLP クラスにおいてマイペースに学習してきた私のような者にもチャンスを与えてくださったことに感謝したい。ありがとうございました。



東大・南大学生交流の様子
(撮影・王文欣 2020年8月)

5-5. 「謝謝同学们、老师们。」

王 経博

2013年からスタートした東京大学トライリンガル・プログラム（TLP）では、毎年夏に（株）ゼンショーホールディングスさんから資金のご援助をいただき、南京・東京両大学が日程やプログラムを調整して中国・南京で行われる、3週間の中国語サマースクールがある。これは、中国語の能力向上と中国社会の更なる良い理解のために行われるもので、南京大学の外国人向け中国語教育の専門教員を講師として、全て中国語で授業が行われる。

しかし、今年度の中国語サマープログラムは、新型コロナウイルス蔓延の影響で、学生の派遣を断念せざるをえず、プログラムの調整を余儀なくされた。そのため今年度は、春学期の大学のオンライン講義でも使用した、オンライン会議サービス ZOOM を利用して在宅で開講された。8月10日(月)から8月28日(金)までの3週間、平日の毎朝8時（中国時間；日本では9時）から50分授業が4コマあり、午後には、南京大学の学生との交流や教授方の講義の時間が2時間分用意され、ほとんど毎日、生身の中国語に触れながら、自らの中国語の会話技能を駆使して交流する機会が設けられた。

午前中の授業には、外見や性格から始まり、職業や試験、スマートフォンなど日常場面での会話を中心として議論を交えた会話中国語授業と、小説文や随筆などの読解、語彙や文法の解説に重点をおいた総合中国語授業の2種類あり、私たち2班では、それぞれ南京大学の刘璐老師、王大莹老師が担当してくださった。午後の南京大学の学生との交流では、同年代の学生が用意してくれた中国料理や衣食住の文化などについての発表を聞きながら、適宜討論や質疑応答を交えて、お互いに理解しようと努め、丁寧に、かつ互いの文化や社会を尊重しあった素敵な交流体験となった。南京大学の教授方が毎週木曜日の午後に行ってくださった中国語講演では、中国の文化や歴史、教育の実情を、実際に目撃し、研究してきた現地の教授方の感性や観点から学習することができ、非常に実りのある学びの時間となった。また、2度に分けて行われた田家炳高校日本語クラス生徒との交流会では、田家炳高校の皆さんの高校生らしからぬ堂々とした様子と、非常に流暢な日本語を操って学校や街中、観光地など様々な中国社会の有り様を伝える様子に、終始感心してしまった。私たちも彼らのように中国語を使っ

て日本の様子を案内することができれば、と少し後悔の念も生じた。

しかし、やはりこのような中国語に囲まれた環境の中に居ることで、自らの技能を磨きつつ、それを駆使して成長するというような言語を学ぶ楽しみを経験することができた。自分の中国語学習において壁に感じていた、現地の方々と会話をするという初めの一步を踏み出す後押し、勇気も与えてくださったこの南京サマースクールという貴重な機会に、私は心から感謝している。

もともと私は TLP の生徒ではなく、東京大学に入学後に初めて、中国語を1年間学び、2年の春学期に自ら TLP 相当の授業に志願し、学習を続けていた。私の中国語学習の原動力は、私を育ててくれた両親である。両親は共に中国の出身で、勤めていた会社の仕事の関係で私が3歳の時に日本に移住し、以降はずっと東京で暮らしていたため、私は日本で日本語による教育を受けてきた。いつしか家の中では、両親は私に向かって中国語で話しかけ、私は両親に向かって日本語で返答する、という会話形式が定着してしまい、中国語を発音・発声することが無くなった。私のこの悲しい現状を打開することはもちろん、日中両国の政府間の関係が決していいとは言えない昨今ではあるが、日本語・中国語を習得した人材は、これからの両国の発展やアジア全体の平和や成長にも深く寄与するはずであり、地道ながらも両国をつなぐ架け橋となる存在として一步一步努力していきたい、という思いが私の中で強まっていた。

そして、今回の南京サマースクールを通して、オンライン上ではあるが中国の生身の方々と触れ合うことができ、私は両国を取り巻く社会や文化にもより一層の関心を抱くようになった。この経験から私は、「職業」についての会話中国語の授業で取り扱った様々な職業の長所と短所に対する議論で、「責任重大で忙しく、協調性が必要とされる」が、「国々の関係強化や関係改善に努める非常に重要で、国際協調・平和への基である誇るべき」な、「外交官」の仕事に憧れるようになった。これから迎える大学の後期課程では、国際関係論や外交政治を勉強していきたいと強く考えるようになり、これは今の私の大事な将来の指針の一つになっている。

5-6. 「中国語をマスターしたい」

妹尾 なつみ

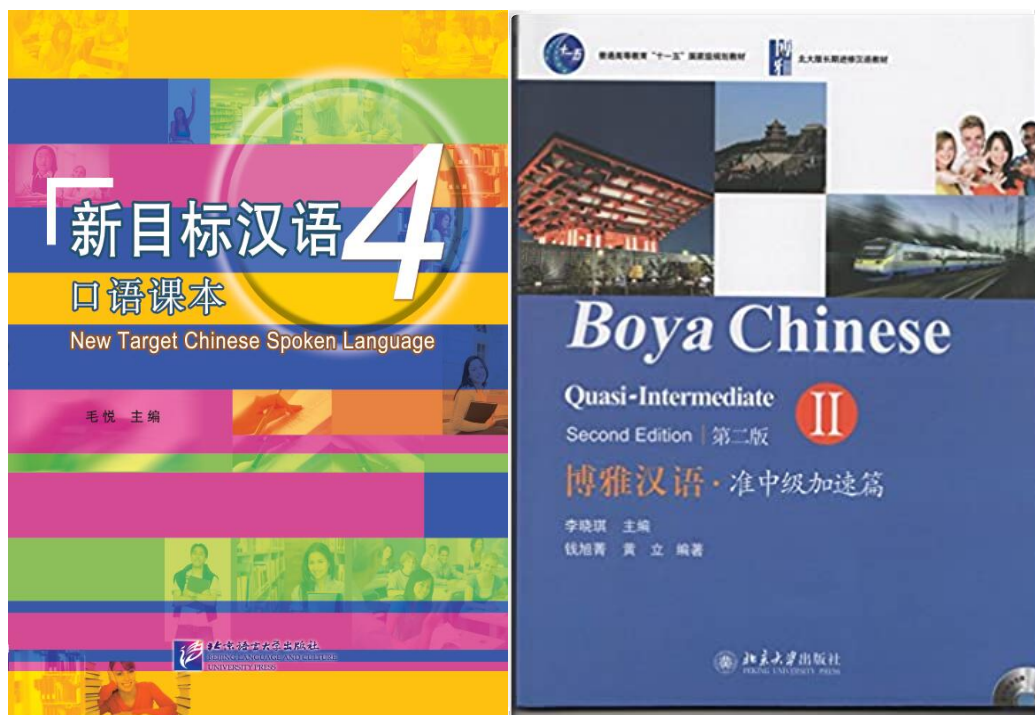
正直に言えば、私は初めオンライン開催のサマースクールに対するモチベーションがそれほど高くなかった。もちろん最終的には自分の中国語の実力向上に役立つだろうという確信を持って参加を希望したが、直前まで応募を迷っていた。しかしながら、3週間のサマースクールを終えたいまあの時に応募をやめなくて良かったと強く感じている。この3週間で私は中国語を自在に操れるようになりたいと強く思うようになったからである。私にそのような変化をもたらした要因をここでは2つ紹介したい。

一つ目は、授業の中で中国の社会問題や中国人によくみられる価値観を知ることができたことである。例えば、中国では食品ロスが大きな問題になっているらしいことを学んだ。私は中国では多めに食べ物を準備して残すのがマナーであるとどこかで目にしたことがあるが、そういう文化もあるんだな、とそれについて特に引っ掛かりを感じたことはこれまでなかった。しかし、今回中国で食品ロスが問題になっておりそれに伴って意識改革までもが提唱されているということを知った。日本でも同じく食品ロスが問題となっているが、文化の違いにより社会問題の原因や改善の仕方が異なりうるということに気づき新鮮だった。このように中国語を学ぶことで日本の社会問題や価値観を相対化することにも繋がる経験を得られ、中国語学習がより興味深く感じられるようになった。

二つ目は、授業内で毎回設けられていた討論の時間である。よく考えてみると、私はこれまで中国語を用いてその場で文を作り自分の意見を述べるという経験をしたことがほぼなかった。しかし今回、討論という形でそれを強いられる状況に置かれたことで、少人数グループということもあるかもしれないが、話そうと思えば思ったよりも自分の意見を中国語で発信することができ、それを他者に理解してもらうことも可能なのだということを知った。これは単純に

私にとって一つの成功体験として印象に残っており、もっと話せるようになりたいと思う原動力ともなっている。

この3週間が私の中国語のスキルを少なからず向上させたことは言うまでもないが、このように中国語を学ぶ意欲を高めてくれたという点が私にとっては非常に貴重であったと思う。この経験をもとに、話したり文章を読んだりして中国語を実際に使う面白みを感じながら中国語の習得にさらに励みたいと思う。最後に、このような機会を設けるためにご尽力くださった皆さまに大変感謝しています。ありがとうございました。



サマースクール使用教科書

左：『新目標漢語4 口語課本』毛悦、北京語言大學出版社（2019年）

右：『博雅漢語：準中級加速篇II（第2版）』李曉琪、北京大學出版社（2013年）

5-7. 「オンラインサマースクールの学習効果」

石川 皓大

今年 2020 年の南京サマースクールは、新型コロナウイルスの影響により、Web 会議システム Zoom を用いたオンラインでの開催となりました。初めての試みだったこともあり、教員・学生ともに手探りの状態であったと思いますが、3 週間の中に、中国語という言語、また中国文化・社会についての多種多様な知見を得ることができたと実感しています。このような形式での開催は今年限りなのか、あるいは来年以降も続くのか、についてはまだ不確定ではありますが、いずれにせよ、今年のサマースクールは例年とどのように異なったのか、そこからどれほどの学習効果が得られたのか、について、実際に体験した一学生としてまとめておくことは、今後の開催にあたって参考になりうるのではないかと思います。

まず、例年との明らかな差異として、「中国を肌で感じる体験ができなかった」ことがあげられます。言語というものは、話されている国や地域の文化と不可分なものですから、中国語の習得と中国文化・中国社会への理解もまた、いわば車の両輪の関係にあります。もちろん、オンライン開催であっても、学生交流やゲストの講演などを通じて、中国文化・社会についての理解を深めることができるのは事実です(実際、皆様が準備してくださった発表・講座は非常に素晴らしいものであり、多くの新たな知見を得ることができました)が、中国の地下鉄、レストラン、街中などで、中国の空気や人々の暮らしぶりに触れ、それらを五感で直接感じることは、それとはまた別種の経験であり、そちらを諦めざるを得なかったことは、状況が状況だけにやむを得ないこととはいえ、いささか心残りでした。とはいえ、このサマースクールの主目的が語学能力の向上であることを考えれば、(もちろん行けるに越したことはないですが) これはそこまで致命的なことではなく、むしろ今回のオンライン授業で語学能力をさらに高めた後で実際に赴いたほうがより高い効果を得られるのではないかと、とも感じています。

一方、今回のサマースクールの主目的である中国語の学習については、対面授業に比べても遜色のない、むしろそれよりも優れた学習効果を得られたのではないかと思います。南京大学の先生方が、あらかじめスライドを準備し、それにしたがって授業を進めるという工夫をしてくださったことで、要点を明確に認

識することができ、なおかつ予習・復習も気軽に行うことができました。また、パソコンの画面共有、画面への直接書き込み、ブレイクアウトルーム、チャットなど、Zoomの各機能を有効活用することにより、従来の対面授業では大掛かりな機材や事前準備が必要だったこと(各学生がスライドを作成して順に発表を行う、先生が全員に動画を見せる、TAの方がチャットを用いてリアルタイムで授業の補足を行う、など)を簡単に実現することが可能になり、それによって効率よく学習を行うことができました。これらの機能が存在することで、オンラインであっても、学生の積極性、授業の双方向性が保たれ、楽しく有意義な授業にすることができたのではないかと思います。

以上をまとめれば、「今回のオンラインサマースクールは、中国文化や社会まで含めた総合的な体験、という面では劣る面が必然的にあったものの、語学能力向上のための機会としては例年と比べても全く遜色なく、授業では対面授業と同等、もしくはそれ以上の学習効果を得ることができた」となるかと思います。1日4時間+αパソコンの前に座り続けた、ということもあり、肉体的にも非常にきつい3週間でしたが、それに見合うだけの成果を得ることができたと感じています。

最後になりますが、この大変な情勢の中、サマースクールを行うために多くの準備と調整をしてくださった東京大学および南京大学海外教育学院の先生方、学生交流の場で素晴らしい発表をしてくださった南京大学および南京田家炳高級中学の学生の皆様、そして今回のサマースクールで経済的支援を賜ったゼンショーホールディングスの皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

5-8. 「画面越しで“体感”した中国」

王 力敏

今回のサマースクールは、新型コロナウイルスの影響のためオンラインという形になってしまいましたが、自分の中で最も強く心に残っているのは、オンラインでありながらも感じられた中国の雰囲気です。自分はもともと、例年のように現地に行けるサマースクールでは、中国語を濃密なスケジュールの授業で学び、中国語力を向上させる、ということに加えて、現地実際に赴くことで現地の空気を吸い、街中を歩いたり現地の人々の日常的な会話を聞いたり、現地の中で自分も生活することで、中国の雰囲気を体感したいと思っていました。しかし、今年このような状況で現地に行けないとなった中、オンラインでも精一杯中国語を勉強し、最大限に中国の雰囲気を感じ取ろうと思い、今回のサマースクールに参加しました。そして、実際に参加してみると、まるで本当に中国に来たかのような、そんな気分になるくらい、中国の雰囲気をたくさん味わうことができました。

まず、中国語にたくさん触れ続けました。実際、このサマースクールでは、午前4時間の中国語授業、午後2時間の交流や講義の時間がほぼ毎日続き、放課後の時間は宿題や翌日以降の発表の準備に費やす、といった生活をしていたため、中国語に触れる量が非常に多かったです。授業がすべて中国語で進められていたことに加えて、放課後に宿題をして WeChat を使用して先生に提出したり質問をしたりするのもすべて中国語で、まるで実際に現地に来て指導を受けているかのようでした。そして、授業中では、これまで知らなかった単語や文法事項を新たにたくさん学べました。その点で、中国語という言語にたくさん触れ、そこから中国の雰囲気を感じ取ることができたと思います。

そして、言語自体にとどまらず、授業中には様々な動画を見せていただきました。中国語のディベートショーの番組を先生が見せてくださったときには、生の中国語を使った活気のあるトークや、話のリズム、スピード感も感じることもできただけでなく、日本とはまた一味違った中国のユーモアにも触れることができたように感じました。また、中国の様々な都市を宣伝する動画も見せていただき、オンラインで動画という形ではありましたが、それでも中国の都市の風景を見ることができて、その都市の雰囲気を感じ、その場所に行ってみたいという気

持ちが非常に湧きました。さらには、中国の文化についても、授業中や、南京大学の学生さん、田家炳高校の学生さんとの交流の時間において理解を深められたことも大きく、そこからも中国の雰囲気を感じ取ることができたと思っています。

さらには、実際に南京大学の先生方や南京大学の学生さん、田家炳高校の学生さんとの交流の場を設けてくださり、「人との交流」ができたことも非常に貴重な経験になったと思います。文化や言語などを通して交流しようとする時、お互いがそれぞれ自分の文化を伝えて、相手の文化を理解しようとしているという心は同じであると感じられました。今回、オンラインではありましたが、顔や声を見たり聞いたり、会話をすることもでき、そのような“人の心”が見えたのは、とても嬉しいことだと思いました。そしてそのおかげでまるで中国にいて交流できているかのように感じることもありました。

今回、たくさん中国について言語面でも文化面でも理解を深めることができ、たくさん得られるものがありました。画面越しでもこのようにして、実際に中国にいるのと同じように学習や交流を進められたのは、ひとえに南京大学の先生方、東京大学の先生方、田家炳高校と南京大学の学生さんたち、そして支援してくださった方々のおかげだと思うので、心から感謝しています。今回、ビデオや音声などを通して、そして人との交流を通して、中国の雰囲気を存分に体感することができたのではないかと思います。今回学べたことや理解できたこと、今回の交流で知り合えた人たちとのつながりも大切にして、いつか実際に南京を訪問し五感を使って実体験したいと思います。そして、これからも中国の文化や言語についてもっと学び続けていきたいと思います。本当にありがとうございました。

反省会

6. オンライン反省会記録（9月11日）

司会：熊木雄亮

熊木：皆さんの報告書を読んでいて、共通している部分だったり自分では気づかない部分だったりを知れて面白かったんですが、座談会では書いていないところで皆さんが思っていることもあると思うので、良かった点も改善できる点もお話が聞けたらいいなと思います。

皆さんの感想の共通点としては、普段の授業と比べて自分から伝える努力をする主体性が重要だったという点や、現地に行って勉強するのと同じくらいサマースクールを経て中国語や中国への興味、関心が深まったという点があったと思います。あとなるほどなと思ったのは、自国の文化について尋ねられた際などにそもそもそれについての知識がないと中国語は喋れないってことです。例えば僕も田家炳高校との交流で日本の七夕の話について聞かれた際にあまり覚えてなかったんですけど、やっぱり自分の文化を知らない相手の文化との違いを共有したり交流したりするのは難しいんだなって感じました。

米原：私も今熊木さんがおっしゃっていたように、自分の国の文化をあまり理解できてないなっつてのを痛感しました。南京大学の学生との交流では日本と中国の文化の比較をしたんですけど、例えば日本の結婚式の習慣とかについて聞かれてもあまり詳しいことは答えられなくて、これから国際社会で生きて行く上で日本についてもっと知るべきだなあっつていうのを痛感しました。

明畠：文化に関することについて言うと、今まで日本の文化と欧米の文化を比較して欧米の人に対して日本の文化を説明するっつていう機会は結構あったと思うんですけども、日本の文化と中国の文化を比較して中国の人に日本の文化を説明する機会っつていうのは私も皆さんもあまりなかったんじゃないかなっつて思っています。日本の文化と中国の文化って似ているところも結構あるので、これは日本の文化なんだっつていう風にどこまで説明して良いのか分からないと感じ

ることがありました。なので、中国の人と交流する際には日本の文化と中国の文化と両方に精通している必要があるんじゃないかなと思いました。

あと、今回オンラインでやるっていうのが初めてだったと思うので、教科書をどうするのかというのが課題だったんじゃないかなっていう風に思うんですよ。教科書の実物を手渡したりすることができないからメールでやり取りしたんですが、なんととっても容量がかなり大きくてそれをダウンロードして印刷するというのが大変でした。しかも容量が大きいけれどもそのすべてを使うわけではなかった。おそらく南京大学の先生も私たちの反応を見て私たちがやりたいのを選ぶっていう風にするために最初はすべて送ってその中から選ぶっていう形をとってくださったんだとは思いますが、最初は量が多くてなかなか大変だったので、そのところは課題だったのかなっていう風に思います。

熊木: 確かに、最初怒涛の量が来てどれがどれだかわかんなくなっている生徒さんも見かけたので、それは共感できますね。

妹尾: 私がみなさんの感想文を読んでいて共感できたのは、オンラインだったけど中国のネイティブな空気感とかを感じることができたということです。確かにオンラインだったら語学学習自体には支障はないだろうということは予想できていたけれども、本場の雰囲気まで感じられるとは思っていませんでした。東大で教えてもらう先生とちょっと言い回しが違ったりとか、実際に WeChat を使ってみたりとか、そういうところからオンラインでも本場の雰囲気を感じられるっていうのがわかってすごいなと思いました。でもやっぱり実際に行くのとは全然違うなとも思います。2 班の総合の授業の先生が最終日に南京をビデオ通話しながら散歩していろいろ説明してくださったんですけど、やっぱりその 1 時間だけでもそれまでの 3 週間の授業と視覚から得る情報量っていうのが全然違うなと思ったので、やっぱりオンラインで語学学習に支障がないってわかって訪問する機会が減ったり失われたりするの残念だなと思いました。

熊木: 確か報告の中にも、地下鉄とかレストランで感じる町中の空気とか人の暮らしたんかは感じられないっていうのがオンラインの難しいところのひとつというようなことが書いてあって僕もなるほどなって思いました。

王力敏：私もオンラインでも中国の空気感とかは感じられたと思うんですけど、やっぱり現地に行ってみたかったなって気持ちがすごい強いです。地下鉄とかで感じる中国の空気とか、その空気の匂いとかからわかる中国の活気とか雰囲気とか。私一度旅行で北京に行ったことがあるんですけど、その時に現地の方同士が話しているのを聞いて感じた中国の長い歴史からくる人のおおらかさみたいなのがすごく印象に残っていて、今回も南京に行ってそういう何気ない会話から中国の人の感じをもうちょっと味わってみたかったなという気持ちがあります。

あと私こうやって東大とか同じ学校の人で集団でどこかに行くっていうプログラムを他にも経験したことがあるんですけど、その時は割と同じ学校内とかその集団内で仲良くなってそこに閉じこもっちゃって、現地の人との繋がりはちょっと弱くなっちゃうってところもあったんですよ。別にそれが悪いと言ってるわけじゃないんですけど、今回はあまり東大生同士のつながりがそこまで現地に行くよりは強くなかったかなって個人的には思っていて、その分中国の先生とか南京大学の学生さんたちとか現地の人との繋がりを大事にしようって思っていました。オンラインだからこそもっと現地の人とのつながりを大事にできたんじゃないかなって思います。

熊木：確かに、特に1班と2班なんかは最初から別れちゃったんで交流する機会が全然なくて僕も寂しいなと思いました。その反面、留学とかに行くと日本人の学生が日本人同士で集まって日本語喋ってて、結局現地の人たちとの交流や外国語の能力の向上とかそういうものがおろそかになってうまく目的が果たせなかったなんていう失敗談もよく聞くので、そういうのがなかったのはオンラインの一つの面白いところだなと思いました。

小坂：僕としては、WeChat や Baidu、bilibili などの実際に中国人が使う検索ツールとかアプリとかを日本にいても使う機会が多かったりだとか、すごく長い2時間の昼寝の時間が設けられていたりだとかで、一種の中国の文化を日本で疑似体験できて意外にも現地の生活っていうのを感じられたかなと思います。ですが、やっぱり報告書を読んでいるとそれでも向こうに行って肌で感じたいって人はいたなって印象を受けました。まあもちろんオンラインですし限界があるのですが、そこで僕がすごい良いなと思ったのは、高校生との交流とか

南京大学の学生との交流とかで、向こうの方が実際に自分で現地に赴いてビデオを撮って発表などに添付していたことです。そうすることで現地の音とか空気感とかもオンラインでは最大限感じられたのかなっていう風に僕は思っていて、もしオンラインで今後もこのような機会があるのであればそういう形態もありがたのかなと思いました。

やっぱりオンラインには限界があるのですが、この南京研修は一応語学研修が一つの目的なので語学について述べると、僕としてはよく向こうの先生方が用意してくださったなと思っています。予習して小テストを受けて復習してねっていう風な流れがちゃんとできていましたし、発表がある時もちゃんと来週のどこどこまでにやっという風に事前に教えてくださったので学習のめどが立って勉強しやすかったなと思います。最初は確かに Zoom の仕様とか不慣れだったんですけども、どんどん先生方も慣れていって最終的には（オフラインと）遜色ないような授業を提供してくださったなっていう風に思います。課題としては、確かにさっき王（力敏）さんがおっしゃっていたように日本人同士の交流が少ないっていうのはあって熊木さんがおっしゃったようにそれにもメリットはあると思うんですけど、それ以上に向こうの南京大学の学生との個人的なつながりとかも少なかったかなと思います。もしできたら例えば授業外とかにちょっと Zoom してみたりとか、もうちょっと授業外での関わりとかが持てればなお良かったのかなっていう風に僕個人としては思いました。

熊木：なるほど。語学の勉強っていう面に関しては、もう皆さんもずっと対面授業と同じぐらい、もしくはそれ以上の効果が得られたんじゃないか、みたいな話を書いてあって、確かにその通りだと僕も思います。あと動画なんかは現地の学生が実際に撮って、日本語の訳をつけてくださったりとかして、こんなに準備してくださったんだって、見るだけで画面を越えて熱意が伝わってきたと感じています。その一方で、小坂さんが言った授業とか活動の外で学生同士がなんとなく交流したりするっていうところも意外と学びがあるところだったりするので、そういうところがオンラインだとなかなか作れないのが本当に難しいなあとと思いますね。

Y.T: やっぱり幾人かの人がおっしゃるように、生で南京のアウラみたいなものを感じたいっていうようなことはもちろんあるんですけども、でもやっぱりオンラインでできる限りのことは南京大学の方もなさってくれたと思います。

でもオンラインならではのこともあって、例えば南京大学に行って中国の語学とか文化とかを学んでいく場合、そこに集中してしまうわけですね。でもオンラインなら行くまでの地理的な制約とかがないんで、3週間の研修の間も別の勉強やゼミなどの別の活動など研修以外の自分がやるべきことも一緒にできるっていう面で、オンラインの方が良い部分もあるかなと思いました。

中国語でずっと授業を受けることはもちろん新しい体験として良かったんですけども、東京大学の授業でも中国出身の先生方はたくさんいるので自分が最大限に活用しようと思えば（同等の学びは得られる）。だから、今回の良かったと思うような点を、裏を返せば東京大学で受けられる中国語の授業だとか、中国出身の学生との交流とかいうものを最大限に活用できていなかったという反省点にもなりうると思っています。

熊木: まず、この南京サマースクール以外の活動をしながらでも参加できるっていうのは本当にその通りだなと思います。この中には東大から遠い実家だったりに住んでいる方もいると思うんですけど、そういう人でも時間とかお金に制約されずに参加できるっていうのは、オンラインの良い所だと思いました。

あとは報告書にも東大の授業と南京大学の授業の比較として南京の先生は生徒に問いかけることが多く自分の考えを言う機会が多かったって書いてあって、なるほどなと思ったんですけど、それも確かに東大の授業だからできないとかそういうことでは決してないことだと思います。東大の授業でも自分が意欲を見せて質問とかすれば先生の方からも問いかけて下さると思うし、自分の答えを言う機会がないのも自分たちが積極性がなかつただけとかそういうこともあると思うんで、この経験を東大の授業に生かすっていうのは面白い考察だなと思いました。

前田: 私の方からも、良かった点と改善できればいい点っていうのをあげられればいいかなと思います。

まず良かった点としては、ブレイクアウトルームを活用できたことがあげられます。なんでかって言うと、オフラインならグループワークの際に（グループ

に分かれても)ほかの人の話が入ってきて自分たちの話に集中できないとか、毎回物理的に移動しないとイケなくて大変だとかいうのがあるんですが、それを今回省けたのはすごい良かったかなって思います。

あと WeChat を使って普通に先生と連絡できるっていうのは凄い画期的だなあって思いました。授業外でも何かしら連絡をしたい時にすぐ連絡できるので、返却された課題について夜とかにちょっと質問があったときでも連絡すればすぐ返ってくるというのが良かったなあとと思いますね。課題の返却っていう点では、電子媒体で送信したものをそのままデータ上で添削してから返却されるっていう形式を 1 つの授業ではとっていたので、そのまま確認しやすい形態でそれは良かったかなと思います。

あと結構大きかったのが、実際に現地に赴いて授業に行ったりそのあと街歩いたり実際に動く所がなかったっていうのは、実際の体験にはならなかったっていう反面、その分の体力的な疲労というのが削減できたなっていうのがあります。そもそも学ぶのに精神的な疲労がかかるので、体力的な疲労がそれほどなかった分、精神的な疲労を受け止めやすいかなと思いました。

ちょっとマイナスな点で言うと、普通こういう研修は現地に赴いてその間は 100%その研修に集中するのが理想的だと言われますが、オンラインになってしまったからそれができなかったと思います。例えばバイトに行けるとか、ほかの活動に参加できるとか、私で言えばジムに行ったり部活に参加したり友達とご飯を食べたりとか、結構いろいろやっていたので研修に 100%没頭することはできませんでした。オンラインは便利なんですけど、完全に研修を活かしたいと思ったらやはり完全に南京のことを考えないといけないんだなあっていうのをすごい思いましたね。課題がすごいたくさんあるのに、例えばバイトが 11 時とか 12 時ぐらいまであつて帰ってから課題をやるとなると時間がなかつたりとかしたので、私も時間管理をもうちょっと何とかしたかったかなと思います。

何人かこれまでお話していたところで、やはり授業外とかでの東大生の間、南京の大学生との交流が足りていなかったっていうのがあったんですが、それに関する改善点として、常設ズームみたいな常に空いてるズームの部屋を設置して、例えば昼休みとか夜とかもずっと開けておいてその時時間のある人同士がお話したりとかもできるんじゃないのかなと思いました。もし今年度以降このようなオンライン形態でやるのであればそういうものを検討してもいいんじゃないのかなって思いました。

山田：まず今回の南京サマースクールのメインテーマは語学の学習と中国文化の理解を深めるっていうところだったと思うんですけど、その裏テーマとしてオンラインでこれをやることの意味、意義っていうのを学生、やってくださった教員のみなさん、あとは向こうの学生の方それぞれが何らかの形で考えながらやってたのかなっていうのを思っています。今までの南京サマースクールは中国に行ってやるってのがまず一つの目玉としてあったのが、今回はそれがなくなっているわけじゃないですか。だからこそこで何かできることはないかなってそれぞれ探りながらやっていくってところが今回大事になってきたのかなと思います。その中で僕が今回意義として思ったことっていうのを今から二つほどあげさせてもらいます。

一つ目は、オンラインだからこその期間を濃密な時間にできたってことです。これまでのサマースクールって午前中に授業があって午後は基本的に自由時間ってイメージがあったんですけど、今回は平日は午前中毎日 4 時間授業あって、加えて午後はほぼ毎日 2 時間何かしらのアクティビティがあって、それにさらに宿題やプレゼンの準備があったりとか、先生と WeChat で話したりとかして、日本にいながらにしてこんなに中国語に時間と労力を費やせる環境ってのが作れるんだなというのを思いました。このスケジュールを立ててくださった先生方とかもすごい大変なんじゃないかなっていうのを思いながらスケジュールを作成されたんじゃないかなってのは思ってて、もちろんこのスケジュールをこなすのは割ときつかったんですけども、結果として日本にいてもこれだけ中国語漬けに、中国語にどっぷり浸かった状態になれるんだなって思えたのがひとつ収穫でもあるし、オンラインだからできてる部分なのかなって思いました。

二つ目は、積極性が大事だなっていうところです。正直やっぱりオンラインの環境って限界あって個人的にはやりにくいなというのを思いました。僕の元々の性格としてあんまり自己主張するタイプじゃない上に、オンラインっていうマイクとビデオをオフにしてしまえば完全にシャットアウトできてしまったりネット環境が悪いからとか言い訳できちゃったりする、やりにくい環境ではあったんですけど、だからこそちゃんと自分で言っていけないといけないんだなっていうのを思いましたね。僕も後半の方から例えば授業の時の発言だったり先生への WeChat での質問だったりとかは積極的にやり始めました。そうすると、

例えば授業のやり方だったりとか交流の進め方とかも、みんなでこうこうこういう風にしたいんだけどっていう風に言ったら、ああ、じゃあそうしようかみたいな感じで変えられたりとかあったので言えば変えられるんだってことを学びました。ちゃんと自分から言っていくっていうのが必要なんだっていうのを今回やりにくい環境だったからこそ実感できたなって思います。

個人的に今回の南京の研修の中ですごく衝撃的だったのは、最終日の前日の木曜日の講演で、手話についてお話されていた賀曉星先生がいらっしゃったじゃないですか。そこでどういう話がされていたかは皆さんも覚えてると思うんですけど、僕が特に印象に残ったのは、自然手話が世界のどこに行っても通じる、っていう話とか、手話を話す人たちの間で、独自の社会っていうのができて、僕の以前の手話のイメージとしては、こういう普通の口頭での会話のある種下位互換というか、仕方なく耳が聞こえない人というかしゃべれない人が仕方なく使うものだ、というイメージが僕の中ではあったんですけど、そこがそうじゃないんだ、っていうのが結構衝撃的で、そこがイメージと変わったな、というのがありました。ちょっと社会学とかの話も途中あたりしたのでなかなか僕の今の中国語の理解レベルとそういう分野の理解の足りなさとか、難しいところもあったんですけど、そういうところででも学べたものがあったかな、と思いました。

けっこう長くなっちゃったんですけど、最後本音として一つ言っておきたいことが一応あります。感想文の中で日本の文化について知らないなと実感したみたいな話があったと思うんですけど、僕としてはその件でそこまでめちゃくちゃ悲観的にならなくてもいいんじゃないかなと思ってて、そういう風に実感したって言っている人たちは、向こうの学生さんたちがすごくちゃんとしゃべってるのに対してこっちは、っていうのがあったと思うんです。確かにそれはそうですし、それを自覚するのは悪くないんですけど、向こうの学生さんはしっかりと時間をかけて準備して、パワーポイントとかもデザインとかも凝っててやってくれてたりとか、それこそ日本語をのせてくれてたりとか、で、それに対してこっちは急に質問を振られた形なので、何ていうか準備時間的には完全に対称な状況になってるわけじゃなかったから、そこをある種多少自分たちを下げすぎる必要はないのかな、とは思っています。一班の方の交流だと、最後から二回目の回の交流以降は、交流の中で向こうの学生さんが質問してくれる質問の内容をあらかじめ教えてくれるよう、僕が提案させてもらったんです

けど、お願いして、その時は一班の人たちはちゃんと準備してきてくれて、ちゃんと答えられたかなというのがあったので、そこはそんなに悲観的になることはないのかなと思っています。最初質問を先に教えてもらうことを提案させてもらったのはまあ、僕のプライド的に、向こうの学生さんが中国の文化を紹介してくれてるのに、こっちが何も準備もせずに紹介をしてるのが申し訳ない感じがして、向こうとしては語学研修がメインなんで、ある程度アドリブを振ってその場での会話の練習、という意味で機会を与えてくださってたのかもしれないけど、とは言え向こうの人たちも日本の文化に興味を持ってくださってるので、そこはちゃんと喋った方が良いかな、と思ってそういう提案をさせてもらいました。で、提案としましては、ある種こっちからもちゃんと日本の文化を紹介できるような、向こうの人が準備してくれてたみたいにこっちも先に準備をする必要があるというのをあらかじめ共有しといて、それを各自分担するなりなんなりして、こっちが準備できるようなシステムや枠組みを作っておくと、来年以降とかはいいのかもしれないなと思いました。

熊木：ほんとに最後の部分は、特に僕も感じて、例えば僕たち二班も中国の結婚の文化について話があって、向こうの学生さんが日本の結婚方式についても紹介してくれて、その時に僕が「日本人なのに、全然そういう伝統的な結婚作法について知らなかった」って言った時に、向こうの学生さんが、「私たちも発表の準備をして、パワーポイントを作るまでは知らなかった、今回の準備を通して新たに知ることができた」っていう風に話していたんです。確かに自分たちの文化についてすべて完璧に知っているというのは不可能じゃないですか。だから、こういう研修を通して、そういう理解するツールとなるというか、「知らないことがあるんだな、知ることができたな」と思うことに価値がある、ということについては本当にその通りだなと思いました。あと、田家炳の第二回目の交流の時に、6名の方がパワーポイントを用意して、少ない時間の中でとても細かくきれいに準備していたのは、たぶん現地の学生の方のパワーポイントとか動画とかだったり、そういった準備を入念にしてくださったのを見て、みなさんが、向こうの現地の学生が日本の文化にあんなに興味を持ってあんなに勉強していらっしやるっていうのを見て聞いて、それでこっちも何か紹介したりこっちからも発信したいっていう気持ちがあったからだとは思って、確かにそういう事前に準備をしたり、もっとこっちからも中国語を使っ

て日本のいろんなことを発信できる、まあもちろんそうするとより準備が大変になったりっていうのはあると思うんですが、それでもそうできたら素晴らしい機会になるんじゃないかと思いました。

施：自分が今回の研修で感じたのは、さきほどからも何回か話があったと思うんですけど、自分の国の文化をちゃんと理解してない、みたいな話なんですけど、自分は、日本生まれ日本育ちで家族がみんな中国人、っていう境遇で、どっちが自分の文化かって言われたらよくわかんないんですけど、ずっと向こうの紹介も聞いてたし、こっちの東大の学生が話すのも聞いてると、なんかどっちもちょっと中途半端だと思いました。日本にずっといたんですけど、まあなんかそんなに僕は小さい頃とかは地元の行事とかもたぶん積極的に参加する方とかではなかったですし、で、まあ当然日本に住んでるので、中国のこともあんま知らなくて。なんか夏休みとか小学校の時とかは二週間くらい、向こうに祖父とか祖母とかの家があるので泊まっていたりしたんですけど、あんまり観光とかもしてなくて、まあ正月とかは合わせて20人くらい集まったり、何日間か入れ替わりでものすごく人が来たりして、それこそ爆竹とかも目の前で見たことがありますし、本当にずっとしゃべってて、なんとなく空気っていうのは感じたことはあるんですけど、まあでもよく知らないというか、皆さんが「日本の文化をよく知らない」って言ってますけど、それ以上に自分は知らないし、中国のことも知らないし、みたいな感じで。たぶん自分の境遇とかだと理想的にはどっちも詳しくて、それこそ交流の手助けをする役とかなんだと思うんです。交流会とかでも、理想的な状態で言えば僕とかまあ中国語の能力があって、文化も知ってれば、交流とかも話のサポートとかもできたと思うんですけど、もうちょっとどっちも理解していく必要があるなあ、っていうのは強く思いました。

あと授業の具体的な話で言うと、さっきも山田くんとかも言ってたんですけど、南京の大学生の交流が6回あって、一班のことしか分からないんですけど、6回目はこちらがスライドを作って、8人が2時間、ちょっと超しちゃったんですけど、一気に発表しました。前の5回は、向こうがスライドとかもものすごく凝っててクオリティ高くて、わかりやすく作ってくださって、ちゃんとこちらに話を振っていただいてこちらが答えて、でさらに向こうもちょっと補足しながら話を進めてくれる、っていうようにちょっと向こう側の紹介の方が比

重が多すぎたかな、って思いました。まあ確かにちょっとこちらは午前中4時間授業があって、同じクオリティのものを作れって言われたらちょっとやばい、たぶんパンクするかもしれないんですけど、ちょっと確かにバランスが悪いなってのは思いました。向こうの方が日本のことをちゃんと理解できたのかな、っていうのは疑問に思いました。

オンラインであったことに関しては、まあ自分はそのままでなくて。「現地に行きたかった」ってのは確かにありますけど、でもオンラインでも結構向こうの紹介とか、でも空気は感じられたとは言えないですけど、ちゃんと動画とかも何回も見せていただいたし、けっこういろんな話とかも聞けて、ちゃんと理解するには不足はないかな、とは思いました。

柳田：今回、南京研修の3週間で過ごして、たまに考えたのは、オンラインじゃないとできないこととか、対面じゃないとできないことと違ってなんだろう、ってのは割とあって、まあ例えば交流活動とかだったら、現地で自分で足を運んでみて自分の目で何か見るとか、っていうのは明らかにオンラインではできないこと、対面じゃないとできないことですし、そこは映像だけ見るのとはやっぱり違うとは思って、やっぱり南京に実際に行ってみたいってのはすごく強く思いました。でも一方でオンラインだからこそあらかじめ壁があるっていうのも分かってるじゃないですか、コミュニケーション取りにくいよ、とか、ネットに問題があるからちょっとうまくいかない、とか。そういうのは本当にあらかじめわかっていることだからこそ、中国の高校生や大学生、教授の話していることを普段よりもより傾聴しようっていうのはやっぱり感じた気がしました。それはパワーポイントがすごくこだわったりとか、ネットワークでしかやり取りができないからこそ、そういう細かい所とかにもこだわった見せ方で、中国の皆さん本当に気を遣っていたかな、っていうのはすごく感じました。で、対面授業に関しては、本当に南京大学の先生方のおかげで、二班の最後の授業で地下鉄とか見せてくれて、そこはやっぱりオフラインでしかできないようなことを学生に体験させようとしてくれたような気がして、すごく有意義だったと思っています。

熊木：確かにその、オンラインである場合に、対面と同じことを頑張るってやろうとするっていうのも大事だし、その一方でオンラインだからできることを代

わりにやる、対面と同じことをやろうっていうことにこだわらない、っていうのもオンラインで上手く実りのある研修をやるうえで大事なことなのかなって思いますね。

浦：今回の南京研修で、メリットとしては、何よりコストがあまりかかっていないこと、そして参加のハードルが低いこと、今回オンライン開催ということもあってお金の面でちょっと、ぶっちゃけて言ってしまうとお金の心配があんまりないということがすごく大きいと思いました。二つ目のメリットとしては、教員からのフィードバックが速かったこと、WeChat などを使って交流をするということは多くの学生さんが挙げてくださったんですけど、やっぱり課題を出した後にちゃんとフィードバックを一人一人にしてくれるというのは本当に手厚いサポート体制だなと思いましたし、中国語を学ぶ上ではそういう環境はすごくいいなと思いました。3つ目のメリットは、やはりお昼休みの存在が大きかったです。やはり日本の大学、まあ東京大学とかだと、昼休みにご飯を取るだけの時間があるって、そこから3時間目、4時間目という風に続いていたんですけど、やっぱり中国式の「お昼休みはちゃんととる」というところで、なおかつ自宅からオンラインで受けられたというのもあってお昼寝をした後に、ちゃんと頭の疲れを取ってから午後に参加できるのはすごくいいことだと思います。以上がメリットになります。

オンラインに関してのデメリットというかちょっとここは不満が残ったかなというのは、やはり多くの方が挙げていたんですけども現地での活動ができなかったというのが一番大きいですね。やはり南京研修はどうして南京に行くかという、中国語の勉強は確かにメインに置くべきなんですけどそれ以外のことでもたくさん学べることはきっとあると思っていて、例えば生徒の皆さんが挙げていた現地の空気を味わうとか、それ以前に例えば中国の南京大学に行くにあたって、おそらく寮で生活するんだと思いますけど、中国の寮が一体どのような生活なのか、でおそらく中国の場合、個人の部屋ではなくシェアルームのような風になってると思うので、そのシェアの生活がどのようなものなのか、そして学校内で食事をするにあたっておそらく食堂とかも使うと思うので、それが日本の大学とどう違うのか、その説明が初日の開会式のスライドのみになってしまって、現地に行ってどのようなものなのか観察するとかそういうのが全くなかったのは本当に残念です。で、そのほかにも例えば例年だった

ら太極拳とかいろいろ中国の文化に自分の手で実際に触れるという機会がいっぱいあると思うんです。それもある種一つの勉強だと思うので、まあ確かに今年も午後にいろいろ生徒たちがすごく準備して発表してくださって、高校生との交流とか、ものすごく有意義なものだったんですけど、そういう中国語そのものを学ぶ以外に実際に自分の手を動かして、文化に触れるというのがなかったというのはものすごく残念だと思いました。少し愚痴めいたものになってしまっただけで本当に申し訳ないですけども、以上が私の感じた今回のオンラインでの開催に関するメリットとデメリットになります。

熊木：現地の中国の南京の大学生の生活についてというのは、チャットにも、今日お休みの原田さんから意見（☆）があって、もうちょっと中国の文化だけでなく大学生活も、僕たち大学に赴けないので向こうの大学での生活は見えないので、こっちの学生、僕たち東大の学生生活もちろん発信する意義はあると思うし、自分たちのすごい当たり前すぎてあんまり意識してないものですけど、文化とかとは別に大学生活については発信したり向こうの大学生活をもっと知ってということができたらものすごく意義のあるものになると思います。

（☆）

欠席の**原田**さんから事前に聞いた意見：

南京大の先生や学生の方々には、大変よく準備してくださって感謝しています。授業も充実していましたし、学生の方々のプレゼンも素晴らしかったです。中国の生活や観光地の紹介が面白かったです。

できれば学生との交流セッションで、数人ごとにブレイクアウトしてテーマごとに雑談ができると、より詳しく気になることをお互い質問したりできるのではないのでしょうか。それから、これは個人的な興味なので来年の参加者たちが興味を持つかはわかりませんが、中国の大学生活についても聞いてみたかったです。（できれば学生の方々の政治的な考えや社会についての捉え方について聞いてみたかったです。それは現実には難しいのだろうとも思います。）東大の先生方も、このプログラムに向けて準備してくださって本当にありがとうございました。

王経博：僕はもともと中国語能力の向上のために参加しようと思っていた部分
がすごくあって、だからオンラインでもすごく充実した授業体制とか、南京大
学の教授方も東大の先生方もすごく準備や支援してくださって本当に感謝して
ますし、やっぱり他の皆さんも言ってたんですけど、授業も集中して4時間、
午後の講義も集中して2時間やりながら、他のことも日本でできるっていうの
はすごく魅力的で、コストが低いっていう面でも新しい発見になったかなとは思
いました。で、その交流についてなんですけどやっぱりその向こうの生徒さん
がすごく準備してくださったことについて、僕らも何か恩返しというか、も
うちょっと事前に準備とかの期間を頂いて、例えば今年は8月10日から始ま
ったのでそれまでの1週間は学校の課題とかも期末とかも一段落して、準備す
る期間としては十分にあったかなとは思ったので、そういう時に何か準備して
こっちからも共有できれば、というのはちょっと思いました。少し、向こうだ
けに伝えさせてしまって申し訳ないなと思う部分がありました。あとは、班に
分かれて8人とか9人とかで向こうは生徒が4、5人とかに分かれて話したん
ですけど、僕は結構シャイなので、やっぱり結構人が多いなって思っちゃうと
ころがどうしてもあって、対面だとやっぱり話さざるを得ない状況っていうの
があると思うんですけど、オンラインだと話さなくても見てるだけでも、みた
いに逃げてしまう部分が出てしまうので、そこの積極性はやっぱり大事だなど
思いましたし、黙ってしまうことも僕はあったので、まあ個人の努力なんです
けど、改善していきたいなと思いました。

熊木：最初の王（経博）さんの先生方に感謝の言葉があったんですけど、4月
にはもうZoomの授業をいきなり東大から始めろって先生方に連絡が来たんら
しいんですけど、そういう状況から始まって、そこから数カ月で、こういうオ
ンラインで、3週間にも及ぶすごい密なものを僕たち参加できたっていうのは
まず、まあこうやって反省点とか改善点とかを出したんですけど、それでもそ
もそもこのレベルまで達したのは本当に先生方のご尽力だと思うし、それはす
べての生徒さんが感想に書いていたり、実際に口で言ったことで、本当にそう
だなあと思うのと、あとは、僕たちの日本の学生側からの発表がもう少しあっ
たらいいっていう話と、あとオンラインだとどうしても画面をオフにするとか
ミュートにするとか、対面と比べて自分が存在しているのかしていないのかが

すごく曖昧で、他の生徒さんが言っていた積極性というものがすごく必要とされて、本当にオンラインならではの難しいところだと思いますね。

石井：僕の前にもかなりの人がかなりたくさん点を挙げてくれているので、僕は手短に行きたいと思います。まず、語学についてなんですけど、Zoomを使ったオンラインでの授業は、対面とかなり遜色ないものだったと思っています。去年までの対面を実際に受けてないので比較はできないんですけど、体感としてはもうほぼ対面と変わらない、むしろそれ以上のクオリティの授業だったと思います。さらには、去年まで実際に南京に行くという部分で、期間も制約があったりとか、期間がたぶん10日か1週間かちょっと短めで、今回たぶん3週間ぐらいだったと思うんですけど、僕は、これは語学の勉強という意味ではかなり良かったと思っています、やっぱり自分は語学は短期間で詰め込むというよりは、長期間やってやって成果が出ていくものだと思っているので、期間が伸びたというのはすごく良かったと思っています。まあそうですね、それに空いている時間とかも僕は結構中国語のドラマを見たりとかバラエティー番組を見たりとか、そういうのができたので、本当に3週間ずっと中国語みたいな感じだったので、自分としては8月の8割くらいは中国語だったのかなと思います。そのぐらい長い期間中国語に集中できたので、自分は語学研修という意味ではかなり満足しています。

次、午後の交流についてなんですけど、まず南京大学の生徒との交流についてなんですけど、最初の方、南京大学の生徒がかなりすごくクオリティの高い発表をしていただいて、でこっちは質問をされて日本の生徒がちょっと答える、みたいな感じだったんですけど、まあそうですね、何しろ日本の学生はまだ最初の方は特にあまり上手く自分の言いたいことが言えないみたいな感じで、あんまり日本のことについて聞かれても自分が言いたいことが言えないみたいな状況になっていて、まああんまりアウトプットできていないみたいな感じだと思います。なので、僕としては、たぶん南京大学の生徒との交流の6回目くらいなんですけど、前半の3回とかは交流というよりはむしろ3コマ目の授業みたいな、体感としてはそんな感じでした。途中から南京大学の生徒さんの方が中国の文化だけではなくて、中国の文化と、たとえば伝統行事とか特にそうなんですけど、中国の伝統行事と日本の伝統行事をどちらも紹介して比較する、それで日本の生徒の方に日本の文化を聞く、という形になっていたんで

すけど、なんかそれでは要するに中国側の生徒が日本の文化についてあらかじめ調べて比較して発表するみたいなことをやってくださって、それだとこっち側のいる意味はないなというか、まあ本当に向こう側が日本の文化も中国の文化も調べていただいて、こちらは全然日本の文化を紹介できていないというような感じだったので、ちょっとそこらへんで危機感を感じて、で、確か3回目か4回目ぐらいの時に僕は「日本の生徒からも発表、あらかじめ作ってきた発表をできる時間を取ってほしい」ということを言って、それで一番最後の6回目ぐらいに、一班の方は日本の生徒が15分から20分ぐらいの発表を8人がするみたいな形になりました。なので、最後の方は結構ある程度交流になった、形になったと思っているんですけど、最初の方はずっと交流というよりは授業という形になってしまっていたので、やはりあらかじめ準備をしていく、まあ最低限の準備を、日本の伝統行事とか文化に関する言葉の中国語訳をしておくぐらいの準備はしていった方が交流になるんじゃないかと思いました。

で、日本の文化の紹介についてなんですけど、これは皆さんも報告書に書いてあったりとか先ほどとかもコメントとかでおっしゃっていると思うんですけど、日本の生徒が、あまり自国の文化についての知識がないということを痛感させられた、みたいなことを書いていたと思うんですけど、まあそれは本当にそれで、中国の七大伝統行事・伝統祝日みたいなものがあって、すごく体系的に発表してくださったんですけど、日本って結構そういうのってないじゃないですか。日本ももちろん七夕とかお盆とか正月とかそういう伝統行事はあるんですけど、もちろん地域差はあるんですけど、結構今の日本ではそういう行事が廃れていって、例えば中国の南京大学の生徒から、「中秋の名月の日何をしますか」、みたいなことを聞かれても、いやまあ空を見上げて月がきれいだなと思うかもしれませんが（笑）、月団子とか僕は食べませんし、まあ特にこれといった行事として捉えていなかったりとか、あと七夕も小学生の頃は短冊に願い事を書いたかもしれませんが、今となっては「あ、今日は七夕だな」ぐらいしか思わないので、まあそれが今の実情だと思うんですよね。で、僕はたぶん文化を紹介するときってだいたいこういう風に廃れているってことをあまり言わないじゃないですか。なんか「廃れている」ってすごく聞こえが悪いですし、なんか伝統行事を大切にしていけないみたいなマイナスな印象を与えてしまうので、すごく言いにくいと思うんですけど、かと言って僕はそれを言わない方が良いとは思わなくて、やっぱり一番知りたいのは現状の今の

日本人がどういう生活をしてるのか、というありのままを向こうは多分知りたいと思っていると思うので、まあそうですね文化の紹介の形としては、僕が理想とするのは伝統もちろん紹介するんですけど、「昔こういうのがありましたよ」みたいなことも紹介してもいいと思うんですけど、それに追加で「今はあんまりそういうのをやってないよ」とか、そういうことも含めて言うとかかなり今の日本の文化とか生活とかそういうのがかなり克明に伝わるのではないかと思います。

熊木：僕もいろいろそれに対して意見がいろいろあるんですけど、特に最後の、僕たち二班も南京大学の学生が、日本の文化と中国の文化を、最初に中国の文化を紹介してその次に日本の文化を紹介するという形だったんですけど、「日本は実際こういうのがあるってインターネットで調べたんですけどどうですか」って聞かれたときに、本当はそれはもう僕たち若者には特にあんまり縁のない文化になってしまったりとかして、そういうのを「ごめんなさい、私たちはそういうものはやったことがありません」っていうのもなんかすごく残念、話しづらいついていうか、せっかく興味を持って向こうは聞いてくれるのに、中国語の能力とかそういう問題じゃなくて自分たちがそういう経験とか、言えることがないから、それで話が終わってしまうっていうのは特に残念だなあとあって、あと、石井さんが言っていた、伝統的なことだけじゃなく今のこと、っていう話で、特に田家炳の高校の生徒さんなんかは結構今の南京の話なんかも話してて、そういう伝統だけじゃなく、もちろん日本・中国って聞くと昔の伝統的なことに目が行きがちですけど、今の高層ビルだったり、新しい自転車のシェアリングだったり、そういうのいろいろ見たじゃないですか。ああいう今について伝えるっていうのも大事な、一つ面白いことだなと思います。

石川：まず、純粋な語学学習の面で言うと、自分が想像していたよりも非常に有意義でしたし、特に情報を受診するだけじゃなく発信する機会、スピーキングとか、そういう機会がとても多くて、普段 TLP の授業とかと比べても、人数が半分とか3分の1とかだったので、当然自分が発言する機会というのも増えるわけで、そこで特にスピーキング力を鍛えることができたんじゃないかと思えます。あと先生方も「パワーポイントを作って発表してください」みたいなことを振ってくださったりとか、あとはブレイクアウトルームでしたっけ、そ

ういうのを使って積極的に我々が発信しやすいような雰囲気を作ってくさったというのが非常に良い点だったのではないかと思います。で、こちらからの情報発信という点についてという、学生交流とか高校生との交流とかの時の話なんですけど、向こうの学生さんからたくさん問いかけとか質問をしてくさって、でもこちらが聞き取れなかったり、聞き取れたとしても日本語でもこたえられないような質問内容だったりして、こっちは言いたいことが言えない、向こうも知りたいことが知れない、でフラストレーションが溜まるみたいなことも結構あったと思うんですね。で、そちらについてはあらかじめ聞きたい質問をピックアップしてもらって、それにこちらが準備して応えるっていうのが一番いい方法なんじゃないかなと現時点では思っていて、実際大学生との交流の5回目にさっきの山田さんが言ってたと思うんですけど、あらかじめ向こうから質問をこちらに投げかけてもらって、そちらに自分たちが答えるという形を取ったんですけど、それが非常に良かったのではないかと思います。で、あともう1点なんですけど、やっぱり先ほど石井さんも言ってましたけど、南京大学の大学生の方との交流で言うと、やっぱり向こうが発表してくさる比率がちょっと高かったかなというのを感じていて、個人的には高校生との交流の時のバランスぐらいの方がちょうどいいのかなと思っています。一回向こうにまず発表していただいて、自分たちがそこで知りたい部分とかを質問とかを考えておいて次回解消する、で向こうについても「こういうことが知りたいです」というのをあらかじめ言ってもらって、それに対して発表するみたいな方が、より交流らしいというか、一方通行ではない情報共有ができるのではないかという感じです。

能森：正直今回の南京研修は語学にみっちり取り組むものだと思っていて、文化の理解はオンラインだしそんなにできないかなと思ってあまり期待していなかったんですけど、実際は午後の交流はもちろん午前の授業でも、先生方が中国の都市に関するビデオとか、最後の授業では弁論会のビデオを共有してくさったりして、そういうもので中国の文化を意外と知ることができて、それが良い意味で驚きでした。そうやって中国の文化をある程度体験することができたのはとても良かったかなと思っています。

あとオンラインで良かったこととして、チャットが個人的にはいいな、と思っています。まず単純に手で書くより早いっていうのももちろんあるんですけど

ど、例えば会話の授業で僕たちが作文して間違っている時に先生がそれを直してチャットに送ってくれたりして、そういうのを見たら全部コピーしてノートにパッと貼りつけたりとかできました。全部手で書くと時間がかかってしまうし、そういった面でやっぱり効率が良いというのもオンラインならではの良いことかなと思いました。

課題としては、これは浦さんが確か報告書でも書いていたんですけど、動画を共有する機会が多くて、授業でも交流でもいろんな動画を共有してくださったのは良かったんですけど、通信の問題なのかカクカクしてしまって。せっかく中国の美しい風景の写真とか歴史のある施設の動画とかを見ているのにカクカクしてしまって結局何だかよくわからなかったみたいなことも何度かあって……。サイトにアップされている動画だったらリンクを送ってもらえば後で見られると思うんですけど、田家炳の高校生が作ってくれた動画だとその時に見逃してしまうと十分に楽しきれないというか、わざわざ作ってくださった動画を完全に消化しきれないっていうのがありました。技術的に厳しいと思うので具体的な解決策は思いつかないのですが、そこがどうにかなるといいかなと思いました。

あともう1つが、コミュニケーションにおける表情や相槌の大事さも痛感していて。今回は授業はビデオオフで受けることも多かったと思うんですけど、南京大学生の交流も南京大学生以外はビデオオフみたいなことも多くて。僕は人見知りなのでビデオオフだとちょっと助かるなっていうか、安堵してしまう部分もあったんですけど、だんだん日にちが経って授業や交流がある程度進むにつれて、向こうの先生や学生が「理解していますか、聞き取れていますか？」ってすごく頻繁に聞いてるなと感じて。なぜかって言うと、こちらがビデオオフだったらいくら相槌とか「うんうん」とかしても向こうには全然伝わらないし、だいたいビデオがオフのときはマイクもオフだったので「うん」とかいくら言っても向こうには伝わらないというのもあって。普通のオンライン授業でもこちらが理解しているかどうかっていうのが伝わらないというのは一緒だと思うんですけど、今回の語学がメインの授業だと聞き取れていない場合に、ビデオもマイクもオフだしまいち聞き取れてないっていうのを恥ずかしくて言えないと本当に置いていかれてしまうという面で、自分が理解しているか、どこが理解できていないかというのを向こうに伝えづらいなというのを感じました。だからといって全員が顔出しできる環境とは限らないし通信の問題もある

と思うので、表情や相手が見えない分 Zoom の反応のボタンでいいねをする機能を使うとか、もしくはその時だけマイクをオンにして「うんうん」とか「明白了」とか「理解してます」とか積極的に口にして視覚で見えない部分を口で補うとか、そういったことをするべきだったというのが個人的な反省としてありました。

熊木：僕たちは1コマ目の劉先生の授業がビデオなし、王先生の授業はビデオほぼ全員ありだったので、能森さんのようにコミュニケーションの違いとかも結構感じたんですけど、1班はどうでしたか？

能森：1班は最初の1限の李先生の会話は全員基本オン、逆に3、4限の先生の授業は基本みんなオフでした。

熊木：1班も2班も両方体験した感じなんですね。

南京の大学の生徒との交流の時間で、聞いたところ向こうの学生は国際中国語教育が専門の方みたいで。大学院1年生なので向こうのほうが少し年上で、中国語を外国人に教えるっていうことが専門の学生の方だったので、中国文化を紹介してくださったり色々話しかけてくださる優しさは本当に感じられて。初めてのオンラインだったのに向こうの学生さんが色々積極的に親切に話してくださって本当によかったなと思います。

あとは、皆さんが言っていた自分たちも少し準備がしたい、っていうのは僕もあとから思って。もしかしたら先生方はたぶん初めての試みで3週間ずっと中国語漬けで宿題もあって、それ以上の負担がないようにと（配慮していた）という面もあったのかもしれないのですが、もしかしたら例えばグループに分かれてプレゼンの準備をする時間なんていうのも、授業だけではなくあったらいいかもしれないな、なんて（思います）。あとは他の方が言っていた何か聞かれて答えるっていうか、即時でこう答えるっていう（ことについて）。語学の大事なところの1つは、自分で文章を考えて書いてそれを読むんじゃなくてすぐに返すっていうのもあると思うんですけど、それだけなのもよくないな、と思って、ほかの東大の学生といろいろ準備してそれを発表する、練って自分から発信するっていうのも少しあってもいいのかなっていうのは確かに思いました。特に日本の文化に詳しくないのにそれについて聞かれてすぐに答え

るっていうのは難しいところがあるし。あと1つ思ったのが、向こうの学生が日本の文化を中国語で紹介してくれた時に、「神社」とか「初詣」とか、そういう日本独特の言葉を中国語のピンインで読まれると一般的に使う字じゃないのでわからない。だからそういうところは、こちらから発表すれば自分たちで事前に調べたり、少し覚えたり（できると思います）。結構常用漢字でないものが多いので。向こうに日本の文化を発信してもらうんじゃなくてこっちから発信するっていうのも、本当に良い機会になるな、と思います。

もう1つ思ったのは、オンラインの場合だと現地に行かずずっと中国語漬けになるのは別で、例えば部活に参加したり友達と遊びに行ったりできるというメリットがある分、逆にその他の課題、中国語に集中できなくなるみたいな（ことが起きる）。現地に行ったら何が何でもずっと中国語漬けっていうのと違って、どううまく日常生活をこなしながら中国語漬けを自分の中でキープするかっていうのは難しいことだなあと思いました。バイトとか友達、僕も実際友達と遊びに行ったりとかいう期間があったんですけど、そういうのがメリットになる一方で、集中力が途切れそうになったりとか、バランスの難しさもあったりして、最初は意識していなかったんですけど、そういうことにも気付きました。

小坂：授業中にビデオつけるかつけないか、もしくはミュートにするかしないかの話で、僕たち1班は1限の李先生の授業だと基本的にはビデオもマイクもオンの状態で、2限はどっちも基本オフで発言する時だけはマイクをオンにするという感じだったんですけど、僕としてはビデオもオンでマイクもオンのほうが、ほかの学生がちゃんと受けてる（というのが感じられて）本物の授業に似ているというか、みんなと一緒に受けてる一体感も生まれると思いますし、また先生からしても学生の顔が全く見えない、反応も伺えない状況で授業するのはすごく大変なのかなっていう風に思ったので、（しかも）少人数だったらビデオをオフにするメリットっていうのがあんまりないのかなっていう風に思ったので、ビデオもマイクもオンでも良かったかなという風に思いました。

王力敏：確かにビデオオンにした方がみんなの表情も見られるっていうのもあると思うんですけど、私も普段対面の授業を受けてるときも先生の言われたことに対してあまり自分が出て行くタイプじゃないので、ビデオオンにした時は

うなずきだけで必死にアピールするって感じだったんですけど、皆さんもけっこう頷いてる方が多くて。で特に1班の1限だとビデオオンで先生が「わかりましたか」というのに対して、みんな頷いているだけってのがちょっと「だけ？」って思っちゃって。マイクはミュートで何も言わないで8人全員頷いているだけで、そこだけシーンって感じがして、割と授業通して先生がしゃべっているのが多い感じがして。逆に1班の2限のビデオオフだと、「わかりましたか」と言われて返事しないとなんか先生に申し訳ない感じがしていたので、「わかりましたか」とか「質問ないですか」とって聞かれたときに積極的に「大丈夫です」とか答えるようにしたおかげで、個人的にはその声を発するというか、一方的に聞くだけではなくて声で反応するっていう感じで、顔だけの無言のアピールよりはビデオオフのほうが声で反応しなきゃ、ってなるので、そのほうがちょっと個人的には好きだったかなって思います。

小坂：確かに頷いているだけだったら先生もいるのかなって（思うだろうなと）いうのはわかって。ビデオオンで頷きはダメですか？ ビデオオン+頷きだったらベストなのかなっていう風に思ったんですけど。わかってないとき僕けっこう「ん？」って表情に出る人なんですけど、先生もそういうのをキャッチしやすいのかなっていう風に少し思って。王さんの意見を加味するんだったら、できればビデオつけた状態で、うなずくだけじゃなくてちょっとマイクオンにして「明白了」みたいな感じで（反応するの）も）ありかなって思いました。

王力敏：わからないときってどう表現したらいいかもわからないじゃないですか。顔で表現した方が伝わると思うし、ベストなのはビデオオン+マイクオンな気はします。

熊木：ビデオオンの時とオフの時と両方いいところがあると思うので、1番いいのはうまく使い分けられる（こと）。特に、最初の自己紹介する時はビデオオフはちょっと難しいと思うんですよ。顔が見えない状態で名前しかわからない状態っていうのは厳しいところがあると思うので。そういうところはオンの方が絶対いいと個人的には思うし、その一方で、音だけに頼るからこそがんばって中国語で伝えようとするとか、特に語学研修だったらそういう面も今聞

いててなるほどなあっていうふうに思って、一方ですっとビデオをオンにすることなく3週間終わってしまうというのも（あまりよくないなど）劉先生の授業、2班の授業でも思ったりもして。先生と学生でいつビデオオンにしてビデオオフにするって決めるか、個人的にうまく判断して（というのがいいと思う）。特にみんながオフにしているとなかなか自分だけオンにする勇気が出なかったりとか、逆にみんながオンにするとこれオフじゃだめなのかなみたいな、同調圧力みたいなのもあったりして結構難しいので、もうちょっと個人で選んだり、うまくオンとオフ両方のいいところを併用できる（ように）個人的になり先生生徒と一緒に決めるなりしてうまく使い分けるっていうのも1つのいい方法かなという風に思いますね。

動画について、カクカクするっていう話は最初の報告書でも動画が残念だったっていう浦さんの話があってなるほどなって思ったんですけど、Zoomだとリンクを送って全員ミュートにして各自がデバイスで見るっていう方法があって。それだと個人だけ見るので、個人のWi-fiに特に問題がなければカクカクせず見られます。語学研修だったら、相手が言っていることが自分の中国語（の語学力）とかの問題で聞き取れないんだったら頑張ろうってなるんですけど、ネットの問題で相手が見せてくれたものが見えなくてうまく感想が言えなかったりするのちょっと残念なので、もしかしたらリンクを共有して各自で見るっていうのが解決方法なのかなという風に思うんですけど。でもそれには1つ問題があって、誰か1人が共有したものをみんなで見るところにもまた意義があると思うんですよ。例えば現地の学生が画面共有で見せてくれてそれを全員で一緒に1つの画面を見る、っていうのに動画題材を共有してみんなで見ると話し合う価値みたいなものが生まれたりもするので、個人で見ると見終わったかなという状況で「じゃあどう思いますか」みたいに話をするのもちょっと寂しいところもあるし、なかなかオンラインの難しいところの1つだなって思いました。

石井：1班の1コマ目の李先生は動画を見せながら説明を加えていたので、そういうのはいわゆる「送って全員見てください」だと実現できない。先生が追加説明できないというデメリットがあるので難しいなあと思います。

前田：実際、田家炳の（生徒との交流の）ところとか2回目が音声が悪くて、何を言ってるのか全然ピンインも把握できていなかったことがところどころあったので、それは動画の共有だけで解消できるものではなくて、通信量の問題だったら話している人以外の画面を切ってもらおうとか、そういうところの改善を色々考えないといけないかなと思いました。聞き取れないと質問自体が分からなくて何言えばいいのかわからなくなってしまうので、そこだけオンラインのデメリットかな、とすごく感じました。

熊木：自分の中国語能力の問題で聞き取れないのか、機材とか通信の問題で聞き取れないのかだと大分感じが違うので、確かに語学の授業だと特にそれが大事かなって。どの授業でも、ですけど。動画を題材にすると現地の雰囲気によりわかったというメリットの反面、通信とか聞きやすさ見やすさの問題っていうのが難しいところですね。

伊藤：石井さんが、1班の李先生の授業では動画を見せながら説明していたって言ったけれども、この時の動画の動きは問題なかった？

石井：少しはカクカクしていたんですけど聞き取りとかそういう面ではそんなに問題は感じませんでした。

伊藤：向こうにリンクを作ってもらって貼ったものをこっちに送ってもらってそれを各自でこっちで見る、ということはできるんですかね？ 南京大学の紹介は動画だけ見せるやつでカクカクしちゃってたっていう話で、それをリンク貼ってもらったのを送ってもらって見るっていう方が良さそうだけど、できるのかなと思って。

熊木：向こうが使った bilibili、自分たちで作ったやつじゃなくてネットから拾ってきたものに関しては、前田さんが後から向こうの学生から教えてもらってリンクを班のグループに共有してくれたりしたので、そういう方法も1つあります。学生が実際に作った動画とかだと難しくなるかもしれないですけど、田家炳みたいな。

伊藤：いろいろと忙しいこともあり大変だったと思いますが、今日はお付き合いいただきってどうもありがとうございました。報告書を読んだだけではわからないこと、書きにくかったことも教えてくれてものすごく参考になりました。今年度は本当に特別な年で、でも皆さんの話を聞いた限りではその中で最大限の効果を引き出してくれたと思います。平日3週間みっちりやったので、これはすごいことだと（思います）。東大の授業1セメスターではコアになる授業だけだと週に2コマ、文系だと3コマが13回ある。理系だとすると26回、1回が2時間相当だとしても50時間相当にしかないのに対して、このサマースクールは60時間ぐらいやったんですね。先生方は日本語ができないということで中国語を話さざるを得なかったという中で60時間をやったということなので。もしかしたら皆さんの中にはまだまだ自分ダメだなど思っている人も多いかもしれませんが、必ずやっぱり力になっているはずです。すぐには（その力を）発揮できなくても、それだけやったってということに関しては自信を持って欲しいですね。過大な自信持たなくてもいいですけど、それだけやったんだって、それを踏まえて今後さらに発展させていけるだろう、いくんだというような感じですね。その経験を今回は振り返る機会だったわけですが、自分の経験値を客観的に、決して自己卑下的に低く評価するのではなく高く評価するのでもなく、そのものどおり自分の今の経験値をちゃんと把握して今後につなげていってほしいですね。繋げていけるぐらいのことをやったと言えると思うんですね。やってない人とやった人でもものすごく違うと思います。中国語に関しても、中国文化に関しても中国人に対する理解に関しても相当違っていると思いますので、過不足なく自分のやったことを改めて振り返って評価して、今後自分の進んでいく道の糧にしていってください。

おわりに

コロナ禍の中の南京サマースクール実施

東京大学教養学部 TLP 委員・LAP 執行委員 伊藤徳也

2020年1月、新型コロナウイルスが中国で猛威をふるい始め、その中心地武漢が23日に封鎖されたというニュースが伝えられた。その後毎日のように伝えられる中国の感染状況と日本の外務省の警報レベルは、学生等を中国に派遣することの甚大なリスクを認識させた。3月に予定されていたLAPの南京フィールドワークと南京集中講義は中止に追い込まれた。しかし、そのころはまだ、インフルエンザのように温かくなれば感染は収まるかもしれない、8月のサマースクールはできるのではないかとといった楽観的な期待もあった。今年度の学生引率が予定されていた菊池真純先生と鄧芳先生に、日程を調整していただいて、以下のように日程を組んでいた。

選抜試験:4月25日10-11時(あるいは11時半)5号館511教室 [実際は7月11日ZOOM]

第一回目ガイダンス:5月14日昼休み KIBER314教室 [実際のガイダンスは1回のみ]

第二回目ガイダンス:7月9日昼休み KIBER314教室 [実際のガイダンスは8月1日ZOOM]

しかし、4月に入って感染者が増え、COVID-19についての知見が蓄積されてきて、8月のサマースクールを、例年のような形態で実施するのは無理であることが徐々に明らかになっていった。募集もその後の日程も徐々に後にずれ込んでいった。

一方、東京大学教養学部は3月に早々と全授業をオンラインで行うことを決定していた。南京サマースクールもオンラインでの実施が妥当と思えた。ただ、南京サマースクールの第一の目的は語学研修であるが、しかし決して唯一の目的ではない。実際に現地に足を運んで三週間もの間南京の人々と同じ空気を吸

って生活し、中国の社会と文化に対する理解を身体レベルにまで深めることは、あるいは第一の目的ではないかもしれないが、第一の目的以上に重要な意義がある。それは何者にも代えがたい貴重な体験になる。それがかなわないとなると、たとえオンラインでサマースクールを実施しても、意義は半減してしまうかもしれない。

しかし、オンラインでも語学研修としての有効性は十分期待できた。コロナのせいで今年の学生だけ夏の語学研修がなかった、というようなことにはしたくなかった。そう考えて、南京サマースクールの語学研修を請け負っていただいている南京大学海外教育学院の朱小易院長に私が電子メールを送ったのは4月16日だった。内容は、

- (1) 今年学生は派遣できない
- (2) オンラインで実施していただきたい
- (3) 南京実地体験ができない代わりに、語学クラスの極少人数化はできないか？ また、南京の名士達に東大生向けに面白い体験談を話してもらえないか？

といったことだった。すると即座に返信が来て、(1)と(2)は承知いただき、ZOOMを使ってはどうかという提案もいただいた。(3)は残念ながら実現しなかったが、その代わりに、南京大学の先生による講演と学生交流の時間を豊富に設定していただいた。まさかあれほど多くの交流の時間を設定していただけるとは思わなかった。(参加者にとって、息抜きの時間がほとんどなく、ちょっときついのではないかと心配したほど)

学生交流プログラムは授業のように確固とした枠組みがない分、良くも悪くもどうにでもなる面があるが、海外教育学院の教務主任にあたる阮艶先生には、想定以上の時間枠を設定していただいただけでなく、周到な調整をやっていただき、結果として、東大生に良いカルチャーショックのような刺激と思索の機会を与えたように思う。クラスの極少人数化は、事前にTLPの学生にアンケートをしたところ、意外に評判が悪く、また、教育学院の方でも調整がつかなかったため、例年通りのクラス編成(20人程度を10人程度2クラスに分ける)となった。

名士にお話しいただくというのは、南京大学海外教育学院としては調整が難

しかったようだが、それでも例えば社会学院の賀曉星教授による講演「中国の社会的弱者」は、日本のマスメディアなどが報道しない中国社会の一面を紹介する本格的なお話で、聴講した東大生にも感銘を与えたように思われる。

ZOOMによる授業は、通信障害やログインをめぐるアクシデントや南京の講師の先生と東大生との間でうまく意思疎通ができないのではないかといった心配は多かつたし、午後の学生交流プログラムもうまくいくのか確信は持てなかったが、振り返ってみれば、いろいろ反省点はあるものの、また、オンラインの範囲に限られてはいたが、いずれも十分な成果をあげることができたのではないだろうか。むろん、本当に成果があったと言うためには、もう少し時間が必要であろう。近くは3年生進学時、あるいは卒業時、そしてもっと本質的には10年後、20年後に、一人ひとりの参加者にとって、この3週間の南京サマースクール体験が「ものをいう」ようになれば、今回のプログラムを仕組んだ人間としてこれにまさる喜びはない。

執筆者一覧

妹尾 なつみ (セノオ ナツミ) 教養学部・文科一類2年
小坂 涼 (コサカ リョウ) 教養学部・文科一類2年
能森 恵佑 (ノウモリ ケイスケ) 教養学部・文科一類2年
原田 紗来 (ハラダ サキ) 教養学部・文科一類2年
米原 有里 (ヨネハラ アリ) 教養学部・文科一類2年
熊木 雄亮 (クマキ ユウスケ) 教養学部・文科二類2年
Y.T 教養学部・文科二類2年
明畠 加苗 (アケハタ カナエ) 教養学部・文科三類2年
柳田 堯紀 (ヤナギダ タカキ) 教養学部・文科三類2年
石井 敬直 (イシイ タカナオ) 教養学部・理科一類2年
王 力敏 (オウ リキビン) 教養学部・理科一類2年
山田 崇太 (ヤマダ ソウタ) 教養学部・理科一類2年
石川 皓大 (イシカワ コウダイ) 教養学部・理科二類2年
浦 彩人 (ウラ アヤト) 教養学部・理科二類2年
王 経博 (オウ タツヒロ) 教養学部・理科二類2年
施 毅龍 (シ キリュウ) 教養学部・理科三類2年
前田 未来 (マエダ ミク) 教養学部・理科三類2年

(2020年8月時点の所属)



2020年度中国語サマースクール参加者及び教員

(撮影・能森恵佑 2020年9月11日)

2020年度 中国語サマースクール（国際研修）

協力

南京大学海外教育学院

担当教員

菊池 真純 東京大学大学総合教育研究センター・特任准教授
鄧 芳 東京大学大学総合教育研究センター・特任准教授

責任教員

伊藤 徳也 大学院総合文化研究科・教養学部 教授

主催

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部グローバルコミュニケーション研究センター・トライリンガルプログラム（TLP）中国語
東京大学教養教育高度化機構国際連携部門リベラルアーツ・プログラム（LAP）

本研修は、株式会社ゼンショーホールディングスの寄付金による支援をいただいて実施されました。

2020年度南京サマースクール報告書

2020 年 12月初版印刷

編集 / 装幀 菊池真純

発行 東京大学教養学部

〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 TEL 03-5465-7671

URL:<http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/> E-mail: admin@lap.c.u-tokyo.ac.jp

表紙写真:南京古秦淮夫子廟（撮影・菊池真純 2019 年 8 月）